令 和 3 年 度

研　究　紀　要

秋 田 県 立 増 田 高 等 学 校

巻　頭　言

校長　坂本　寿孝

このたび、令和３年度の研究紀要が発刊のはこびとなりました。編集者、執筆者各位のご努力に厚く感謝申し上げます。

さて、そもそもなぜ「研究」というものがあるのか、「研究」をしなければならないのでしょうか。その根拠は、教育基本法第９条です。ここに、「法律に定める学校の教員は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない。」とあります。「研究」と「修養」に励まなければならないという、義務です。教基法と同様に、教育公務員特例法第２１条等にも「研究」と「修養」、すなわち「研修」について規定されています。「研究」しなけばならないことを「義務」と考えれば、多少辛い面があります。しかし、このように変化が激しい時代において、その使命を遂行するために「研修」する機会を与えられている、「研修」する権利があると前向きに捉えたいものです。

ご存じのとおり、令和４年４月より高等学校でも新しい学習指導要領（平成３０年３月改訂）が、年次進行により実施されます。ポイントは、まず、知識の理解の質を高め資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」です。「何ができるようになるか」を明確化するため、全ての教科等を①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等の３つの柱で再整理されました。また、生涯にわたって探究を深める未来の創り手として生徒を社会に送り出すために、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の必要性が強調されています。同時に、現代的な諸課題に対応するためには教科等横断的な学習を充実させることや、教育課程に基づく教育活動の質を向上させ学習効果の最大化を図るためのカリキュラム・マネジメントを確立する必要性などが挙げられています。

さらに、令和３年１月には、中央教育審議会から「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～という答申もありました。ここでは、新型コロナウイルス感染症の感染拡大も踏まえながら、私たちにはＩＣＴも活用しながら、「個別最適な学び」（個に応じた指導を学習者視点から整理）と「協働的な学び」（日本型教育がこれまでも重視してきたもの）とを一体的に充実し、生徒たちの資質・能力を育成することが求められているとあります。総合学科については、多様な分野に関する知識及び技術や異分野と協働する姿勢といった、これからの時代に求められる資質・能力を育成することなどが期待されるとあります。農業等の専門学科については、産業界と一体となって地域産業界を支える革新的職業人の育成（専門学科改革）のためには、社会に開かれた教育課程、産官学関係者が一体となった教育課程の開発・実践などの推進が重要であるとあります。本校としても今後、これらについて、積極的に取り組まなければなりません。

年度が変わって４月から、１年生より新教育課程による教育活動が始まり、これからも、研究と教育実践による一層の創意工夫と確かな指導が求められます。令和３年度の研究成果を胸に、生徒に「生きる力」を身に付けさせるという学校としての責任を自覚し、これからも私たち教職員一人一人が知恵と汗を惜しまず、協力し合って歩みたいものです。

目　　次

《 巻 頭 言 》　　校　長　坂本　寿孝

目　　次

《　学　科　》
令和３年度総合学科アンケートの結果について　総合学科主任　小笠原　宏　1
農業科学科の取り組みと課題　農業科学科主任　藤井　亨　5

《　職員研修・教科研修　》
令和３年度　研修計画　研修部　7
校外研修計画（総合教育センター）　研修部　12
校内研修計画　研修部　12
令和３年度第１回職員研修会　進路指導部・研修部　13
令和３年度第２回職員研修会　教育相談部・研修部　15
令和３年度第３回職員研修会　教育相談部・研修部　17
令和３年度第４回職員研修会　研修部　26

令和３年度 第２回指導主事訪問　28
地歴公民科　30
理　　科　33
英　語　科　36
授業研修会
国　語　科　39
保健体育科　43
家　庭　科　46

《　研修報告　》
初任者研修を振り返って　家　庭　科　福田　菜摘　50
実践的指導力習得研修（２年目）を受講して　国　語　科　照井佳那子　52
実践的指導力習得研修（３年目）を受講して　農　業　科　渡辺　大貴　53
実践的指導力向上研修(８年研修)を終えて　保健体育科　小原　拓磨　54
実践的指導力向上研修(８年研修)を終えて　家　庭　科　齊藤　浩幸　55
中堅教諭等資質向上研修・選択研修報告　保健体育科　永須　裕貴　56
中堅教諭等資質向上研修・特定課題研究レポート　保健体育科　永須　裕貴　58

《　授業改善への取り組みについて　》　研修部　59

編集後記

学　　科

令和３年度総合学科アンケートの結果について

総合学科部　小笠原　宏

Googleフォームを使ったアンケートを試み、実施や集計が容易になったが、コロナ禍で実施の日程にも影響があり６８人中５１人の回答となった。例年よりも、総合学科の科目に関心を持って入学し、期待通りと感じた生徒が多くなっている。産社や総合についてはほぼ目標が達せられているが、「感想を書くだけでなく話し合いがあれば」という意見は参考にしたい。系列の科目については概ね期待通りだったが、系列選択については時期が早いという回答が半分ほどあり理解が足りなかったとみられる回答もあったので、今後もガイダンスには丁寧に取り組みたい。

回答人数

R1	R2	R3
71 人	74 人	51 人

【入学前・後の意識】

1 入学の際、「総合学科の高校」ということが学校選択の決め手になりましたか。

		R1		R2		R3	
番号		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	総合学科だから入学した	27	38.0%	28	37.8%	28	54.9%
2	どちらかといえば総合学科だから入学した	20	28.2%	16	21.6%	9	17.6%
3	特に総合学科だからという理由ではない	12	16.9%	25	33.8%	11	21.6%
4	総合学科だからという理由では全くない	12	16.9%	5	6.8%	3	5.9%
無回答		0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

2 入学の際、「総合学科の高校」の特徴についてあなたはどのようなイメージを持っていましたか。
（複数回答可）

		R1		R2		R3	
番号		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	一人一人に応じた指導をしてくれる	6	8.5%	5	6.8%	7	13.7%
2	自分の生き方を考える学習ができる	4	5.6%	6	8.1%	4	7.8%
3	多くの選択科目が開設されている	40	56.3%	29	39.2%	31	60.8%
4	自分の興味関心にあった学習ができる	28	39.4%	33	44.6%	35	68.6%
5	普通科目と専門科目をバランスよく学べる	4	5.6%	6	4.1%	10	19.6%
6	その他	4	5.6%	3	0.0%	0	0.0%
無回答		0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

3 入学前と比べ、入学後に総合学科をどのように感じましたか。

		R1		R2		R3	
番号		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	期待通りだった	19	26.8%	36	48.6%	17	33.3%
2	やや期待通りだった	37	52.1%	28	37.8%	29	56.9%
3	やや期待外れだった	11	15.5%	8	10.8%	3	5.9%
4	期待はずれだった	3	4.2%	2	2.7%	2	3.9%
無回答		1	1.4%	0	0.0%	0	0.0%

【産社・総合における「学び」】

4 産社・総合の時間を通して、入学時よりも自分自身について見つめ直すことができた。

		R1		R2		R3	
番号		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	とてもそう思う	22	31.0%	30	40.5%	22	43.1%
2	ややそう思う	34	47.9%	38	51.4%	26	51.0%
3	あまりそう思わない	10	14.1%	6	8.1%	3	5.9%
4	全くそう思わない	5	7.0%	0	0.0%	0	0.0%
無回答		0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

5 産社・総合の時間を通して、入学時よりもこれからの生き方を考えることができた。

		R1		R2		R3	
番号		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	とてもそう思う	28	39.4%	43	58.1%	23	45.1%
2	ややそう思う	31	43.7%	26	35.1%	25	49.0%
3	あまりそう思わない	9	12.7%	5	6.8%	3	5.9%
4	全くそう思わない	3	4.2%	0	0.0%	0	0.0%
無回答		0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

6 産社・総合の時間を通して、入学時よりも働くことに対して意欲がわいた。

番号		R1 人数	R1 割合	R2 人数	R2 割合	R3 人数	R3 割合
1	とてもそう思う	26	36.6%	40	54.1%	25	49.0%
2	ややそう思う	36	50.7%	29	39.2%	19	37.3%
3	あまりそう思わない	7	9.9%	5	6.8%	7	13.7%
4	全くそう思わない	2	2.8%	0	0.0%	0	0.0%
無回答		0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

7 産社・総合の時間を通して、入学時より社会の出来事に問題意識を持つようになった。

番号		R1 人数	R1 割合	R2 人数	R2 割合	R3 人数	R3 割合
1	とてもそう思う	17	23.9%	29	39.2%	17	33.3%
2	ややそう思う	40	56.3%	40	54.1%	33	64.7%
3	あまりそう思わない	9	12.7%	4	5.4%	1	2.0%
4	全くそう思わない	5	7.0%	1	1.4%	0	0.0%
無回答		0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

【系列・科目選択について】

8 系列や科目選択にあたって、学校側によるガイダンス（指導や説明）は十分でしたか。

番号		R1 人数	R1 割合	R2 人数	R2 割合	R3 人数	R3 割合
1	とてもそう思う	38	34.0%	47	63.5%	25	49.0%
2	ややそう思う	51	29.0%	21	28.4%	23	45.1%
3	あまりそう思わない	7	6.0%	5	6.8%	3	5.9%
4	全くそう思わない	2	2.8%	1	1.4%	0	0.0%
無回答		0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

9 系列選択の時期は適切でしたか。

番号		R1 人数	R1 割合	R2 人数	R2 割合	R3 人数	R3 割合
1	早すぎる	27	38.0%	25	33.8%	25	49.0%
2	適切である	41	57.7%	46	62.2%	26	51.0%
3	遅すぎる	2	2.8%	2	2.7%	0	0.0%
4	その他	2	2.8%	1	1.4%	0	0.0%
無回答		0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

10 系列選択は何を基準にしましたか。

番号		R1 人数	R1 割合	R2 人数	R2 割合	R3 人数	R3 割合
1	卒業後の進路	39	54.9%	40	54.1%	35	68.6%
2	興味・関心	23	32.4%	27	36.5%	11	21.6%
3	資格取得	8	11.3%	5	6.8%	4	7.8%
4	その他	1	1.4%	2	2.7%	1	2.0%
無回答		0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

11 学年が上がる時に系列の変更を希望したいと思ったことはありますか。

番号		R1 人数	R1 割合	R2 人数	R2 割合	R3 人数	R3 割合
1	ある	23	32.4%	18	24.3%	11	21.6%
2	ない	34	47.9%	47	63.5%	33	64.7%
3	どちらともいえない	14	19.7%	9	12.2%	7	13.7%
無回答		0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

12 選択科目の学習内容ははじめの期待通りでしたか。

番号		R1 人数	R1 割合	R2 人数	R2 割合	R3 人数	R3 割合
1	完全に期待どおり	19	26.8%	31	41.9%	15	29.4%
2	やや期待通り	39	54.9%	37	50.0%	33	64.7%
3	あまり期待通りではなかった	11	15.5%	5	6.8%	3	5.9%
4	全く期待通りではなかった	2	2.8%	1	1.4%	0	0.0%
無回答		0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

13 12の回答の理由（主なもの）

1 自分の興味のあるものを極めることができた。
1 自分の進路に必要なものを学べたから。
1 取りたい資格を取得できた。
1 介護についての授業を受けられたから。
2 様々なスキルを身につけられたが、コロナもあり途中で終わってしまったのもあったから。
2 1年の系列選択の時に2年3年の履修科目を教えて欲しかった。
2 あまり受講する教科について理解してなかった
3 あまり選択肢が多くなかったように感じた。
3 受験に対応したものではなかったから。

14 開設されている科目のほかにどのような科目があればよいと思いましたか。

一般常識
柔道、或いは剣道の授業が欲しかったです(護身術として)。
人権と社会的性別(ジェンダー)の授業。
情報の授業をもっと取り入れてもいいと思った。
地理系の科目をもう少し深く学習したかった。
電話の対応の仕方、お礼状などの書類の書き方を本格的に学べる科目。
特にありません。

【進路決定について】

15 高校卒業後の進路はいつ決めましたか。

		R1		R2		R3	
番号		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	入学前	13	18.3%	16	21.6%	7	13.7%
2	1年次	6	8.5%	11	14.9%	9	17.6%
3	2年次	26	36.6%	20	27.0%	19	37.3%
4	3年次になってから	25	35.2%	27	36.5%	16	31.4%
無回答		1	1.4%	0	0.0%	0	0.0%

16 進路は自分で学んだ科目を活かしたものになっていますか。

		R1		R2		R3	
番号		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	完全に活かされている	18	25.4%	28	37.8%	13	25.5%
2	ある程度活かされている	28	39.4%	27	36.5%	25	49.0%
3	あまり関係がない	17	23.9%	11	14.9%	10	19.6%
4	全く関係がない	7	9.9%	8	10.8%	3	5.9%
無回答		1	1.4%	0	0.0%		0.0%

17 現在の進路についてどう思っていますか。
（複数回答可）

		R1		R2		R3	
番号		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	希望通りで満足	45	63.4%	53	71.6%	40	78.4%
2	希望通りではないが満足	18	25.4%	17	23.0%	10	19.6%
3	希望したものがなく、不満	1	1.4%	0	0.0%	1	2.0%
4	希望している進路はあるが、未定	3	4.2%	2	2.7%	1	2.0%
5	進路は未定	1	1.4%	1	1.4%	1	2.0%
6	その他	2	2.8%	1	1.4%	0	0.0%
無回答		1	1.4%	0	0.0%	0	0.0%

18 【総合学科での学びを通して】
総合学科で学んで、自分自身を見つめ、将来について深く考えることができた。

		R1		R2		R3	
番号		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	とてもそう思う	31	43.7%	54	73.0%	25	49.0%
2	ややそう思う	32	45.1%	18	24.3%	25	49.0%
3	あまりそう思わない	5	7.0%	2	2.7%	1	2.0%
4	全くそう思わない	2	2.8%	0	0.0%	0	0.0%
無回答		1	1.4%	0	0.0%	0	0.0%

19 自分の興味・関心に応じた時間割を作ることができた。

		R1		R2		R3	
番号		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	とてもそう思う	19	26.8%	39	52.7%	19	37.3%
2	ややそう思う	38	53.5%	29	39.2%	27	52.9%
3	あまりそう思わない	10	14.1%	4	5.4%	4	7.8%
4	全くそう思わない	3	4.2%	2	2.7%	1	2.0%
無回答		1	1.4%	0	0.0%	0	0.0%

20 さまざまな体験活動を通じて、幅広い視野を養うことができた。

		R1		R2		R3	
番号		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	とてもそう思う	34	47.9%	54	73.0%	28	54.9%
2	ややそう思う	30	42.3%	18	24.3%	23	45.1%
3	あまりそう思わない	6	8.5%	2	2.7%	0	0.0%
4	全くそう思わない	1	1.4%	0	0.0%	0	0.0%
無回答		0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

21 自分の好きなことをみつけることができた。

		R1		R2		R3	
番号		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	とてもそう思う	21	29.6%	33	44.6%	22	43.1%
2	ややそう思う	34	47.9%	31	41.9%	22	43.1%
3	あまりそう思わない	12	16.9%	6	8.1%	7	13.7%
4	全くそう思わない	3	4.2%	4	5.4%	0	0.0%
無回答		1	1.4%	0	0.0%	0	0.0%

22 学ぶことの楽しさを感じることができた。

		R1		R2		R3	
番号		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	とてもそう思う	19	26.8%	34	45.9%	17	33.3%
2	ややそう思う	28	39.4%	29	39.2%	27	52.9%
3	あまりそう思わない	19	26.8%	9	12.2%	7	13.7%
4	全くそう思わない	4	5.6%	2	2.7%	0	0.0%
無回答		1	1.4%	0	0.0%	0	0.0%

23 総合学科に学んで満足しましたか。

		R1		R2		R3	
番号		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	大変満足	19	26.8%	45	60.8%	25	49.0%
2	まあまあ満足	42	59.2%	27	36.5%	21	41.2%
3	やや不満	7	9.9%	1	1.4%	2	3.9%
4	不満	1	1.4%	1	1.4%	0	0.0%
5	他の高校へ行けばよかった	2	2.8%	0	0.0%	3	5.9%
無回答		0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

24 総合学科高校の特徴的な仕組み（「産業社会と人間」「総合」の授業や、科目選択、系列など）について、改善した方がよいと思うことを自由に書いてください。

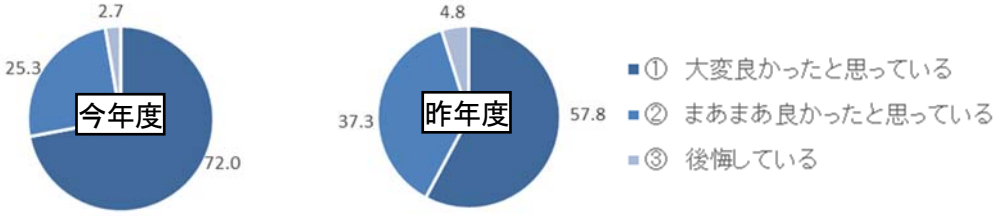
- 総合研究について。地域に根づいた課題をしてほしいのはわかりますが、それで本人のやりたいことが出来なくなるのはどうかと思います。
- 系列の特徴の説明と選択する時間を延ばしてほしい。
- まだ総合学科について誤解している中学の先生がいるので、学校説明会や、系列選択前に充分な説明が欲しい。
- 産業社会と人間では感想を書くだけだったので、話し合いなどを取り入れたらもっと授業の効果があると思う。
- 検定までの予定が詰め込みすぎで大変だったため改善したほうがいいと思う。
- 系列で考査科目数が大きく違うことは改善していくべきと考えます。
- 進路学習の際自分の志望している分野があまりなかったのでもう少し分野を広げてほしい。

令和３年度農業科学科生徒アンケートの結果について

農業科学科主任　　藤井　亨

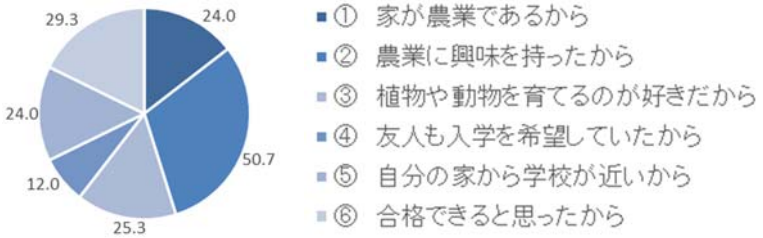
本アンケートは、農業科学科所属生徒の実態を把握し、教育課程の改善を推進するための基礎資料とするため、１６年間継続実施している。対象は農業科学科１～３学年全員とし、１～２月の期間で実施した。本稿では全１１問中６問の結果を抜粋し報告する。

１　あなたは農業科学科に入学してどう思っていますか。（%）



農業科学科に入学して「大変良かった」と思っている生徒の割合が７２．０%となり、２年連続して過去最高値となった。

２　あなたが農業科学科に入学した動機は次のどれですか（複数回答可）。（%）

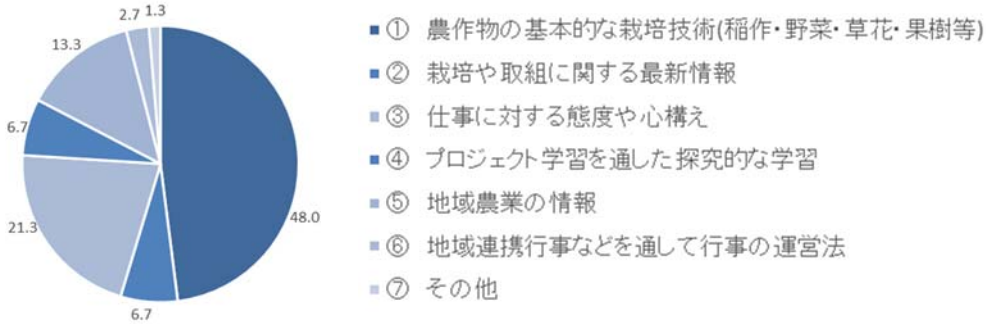


例年と同様の結果となり、「農業に興味を持ったから」次いで「合格できると思ったから」の順であった。今年度は中学生体験入学の体験学習を重視し、学科独自のガイダンスを実施するとともに、高校生のアシスタントのもとで進行した。次年度以降も、中学生にとって農業に興味を持つきっかけとなる内容になるよう改善していきたい。

３　農業科学科の農業学習は実験や実習が中心になっていますが、このことについてあなたはどう思いますか。（%）

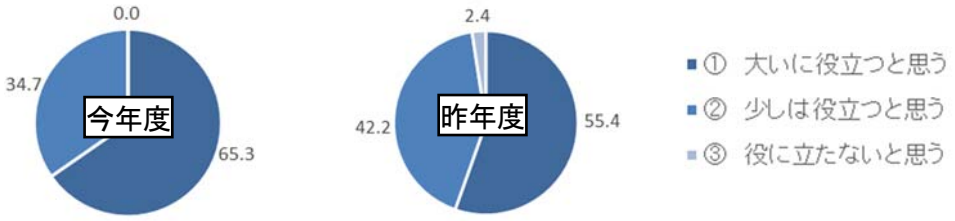
実験実習が中心で「大変良かった」と思っている生徒の割合が８８．０%となり、設問１と同様に２年連続して過去最高値となった。今後も実験実習を通して座学の学習内容を深化させるとともに、地域連携活動を通してコミュニケーション能力や企画力を高めるよう努めたい。

4　あなたは農業科学科でどんなことを学びたいですか。（%）



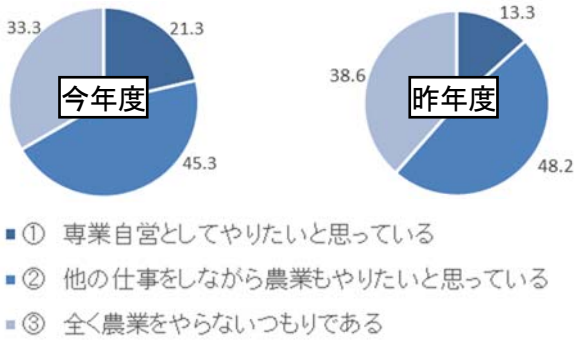
学年別で比較すると、２・３年生は「農作物の基本的な栽培技術」のニーズが最も高く、１年生は「仕事に対する態度や心構え」のニーズが最も高いことが分かった。１年次の「総合実習」における班別ローテーション実習を重視し、望ましい職業観・勤労観を醸成する機会として位置づけたい。

5　農業科学科で学んだことは自分の将来に役立つと思いますか。（%）



昨年度と比較して肯定的に捉えた回答が増加し、「役に立たない」は０となった。栽培技術の指導に加え、「農業クラブ活動」「地域貢献・地域連携活動」「知的財産教育」「ＧＡＰ教育」「ＳＤＧｓ」等の地域密着型の取組をもとに教育活動の更なる充実を図りたい。

6　あなたは将来、農業をやりたいと思っていますか。（%）



非農家出身の生徒が年々増加傾向にあり、今年度は約７３．３%を占める中、全体の約６６．６%は何らかの形で将来農業に携わりたいと考えている。今後も「農業教育高度化事業」や「横手市農業インターンシップ事業」等を活用し、地域をリードする農業者との連携によるインターンシップや講話、先進的な技術の視察研修等を実施することで就農意欲の喚起に努めたい。

研修計画

令和３年度　研修計画

１　秋田県学校教育の目指すもの　＝　豊かな人間性をはぐくむ学校教育

Ⅰ　思いやりの心を育てる
Ⅱ　心と体を鍛える
Ⅲ　基礎学力の向上を図る
Ⅳ　教師の力量を高める

２　本校の教育方針と目標

教育基本法の精神に則り、平和的な国家及び社会の形成者としてふさわしい人間を育成する。この方針に従い、次のような人間を育成することを目標とする。

①　心身ともに健康で、思いやりのある心豊かな人間
②　自ら学び、自ら考え判断し、主体的に行動できる人間
③　正しい勤労観を持ち、郷土の発展に貢献する人間
④　社会の変化に柔軟に対応し、２１世紀をたくましく生き抜く人間

３　各学科の目標

①　総合学科

多様な教科・科目を開設し、生徒の興味・関心に基づき選択履修させ、将来の進路への自覚を深める学習や個性を生かした主体的、体験的な学習を通して、社会の変化に柔軟に対応できる能力と態度を育成する。

②　農業科学科

地域の農業の基幹である果樹と稲作を基礎として、生物生産と経営に関する知識と技能を習得させるとともに、地域の構成員として必要な資質を培い、地域農業の発展に寄与できる能力と態度を育成する。

４　重点実践目標

【進路実現を目指した教育活動の充実】

①　学力向上の取り組み
　ア　組織で取り組む授業改善
　イ　探究型授業の推進
　ウ　言語活動の充実
②　生徒指導の充実
　ア　増高プライドの実践（挨拶励行、時間厳守、整理整頓）
　イ　授業における生徒指導
　ウ　教育相談の充実
③　特別活動の充実
　ア　部活動等による人間育成
　イ　学校行事の充実
　ウ　部活動と学習の両立

【進路実現を目指したキャリア教育の充実】

①学科の特色を生かしたキャリア教育
　ア　資格取得の推進
　イ　課題研究や発表会（ＰＳＰ）の充実
　ウ　キャリア教育の視点に立った授業
②実習やインターンシップを通した人間育成
　ア　増高プライドの育成
　イ　正しい勤労観の育成
　ウ　体験的な学習や活動の充実
③地域連携活動の強化
　ア　地域連携行事の推進
　イ　関係機関との連携
　ウ　情報発信の推進

5　令和３年度の目標　「元気な増田高校」づくりの推進

①　主役を輝かせる教育活動
②　愛校心を育てる教育活動
③　地域連携を充実させる教育活動

6　職員研修の重点目標

課　　題	本年度の目標	具体的方策	研究主題
・生徒の主体性を活かした授業展開の工夫。 ・キャリア教育の視点に立った組織的な授業改善の取り組み。 ・教科横断的学力育成のためのカリキュラム・マネジメント。	・関係分掌と連携をはかり、研修会を実施する。 ・生徒の主体性を引き出し、探求的な活動を導くための授業改善に努める。 ・生徒の実態把握と支援のあり方について、共通理解をはかる。	・校内研修会の企画・運営にあたり、関係分掌との連携を密にする。 ・校内外の研修や授業参観を積極的に実施し、授業改善の手立てとする。 ・各種研修参加後の情報共有をはかる。	・生徒が自らの気づきを大切にし、問いを発することで、対話的で探究的な学びを展開するための授業改善。

7　各教科の重点目標

	課　　題	本年度の目標	具体的方策	研究主題
国語	・生徒の意欲的な学習態度をどのようにして引き出すか。 ・読む力、書く力、話す力の基礎の定着と活用の仕方。	・生徒が主体的に学習活動に取り組む姿勢を育てる。 ・学習習慣の確立による基礎の定着化。 ・国語の力を身に付け、良好な人間関係づくりの土台を築かせる。	・授業のねらいを明示し、それに応じた言語活動を行う。 ・週末課題、家庭学習など学習習慣の確立を通し、国語の基礎力定着を図る。 ・多様な表現活動を通じ、伝え合うことの大切さに触れさせる。	・「生徒の問い」を引き出し、「わかる」を実感できる「主体的、対話的、深い学び」の授業実践。 ・学習習慣の確立から、国語の基礎定着、学力向上につなげる授業のあり方の構築。
地歴公民	・基礎学力の定着。 ・社会的事象に関心と課題意識を持ち、自らの考えを積極的に表現する姿勢や能力の育成。	・基礎学力の養成・定着を図る。 ・課題の発見と探究活動を通して深めた知識や考えを、積極的に表現する姿勢や能力を育てる。	・小テストや授業プリント等を効果的に活用する。 ・メディア等を活用し、社会的事象について考察させる。 ・発問や学習活動の場面設定を工夫し、生徒が意見を発表する機会を設定する。	・生徒の考えを引き出す効果的な発問や探究活動の場面設定のあり方を考える。
数学	・基礎学力の養成。 ・家庭学習の習慣化の徹底。 ・進学希望者の進路達成のための学力向上。	・基礎・基本の養成と定着を図る。 ・家庭学習の習慣化を徹底する。 ・個別指導の充実を図り、応用的な学力の定着を図る。	・生徒一人一人の実態に応じた適切な指導。 ・日常的な課題の作成と添削指導。 ・応用的な学習内容につながる授業展開と既習事項の確認及び指導強化。 （はしわたし授業、コンピュータの活用等）	・学習を通じて「見通す力」の涵養を促す指導法の確立。 ・自発的な学習態度を育成する効果的な指導法の確立。 ・新教育課程に対応した進度の確立（コンピュータの活用等）。
理科	・基礎学力の定着。 ・中高の学習法の接続。 ・科学的な思考力、自然を探究する能力や態度の育成。 ・進学希望者の進路達成のための学力の向上。	・思考の基礎となる基本事項を定着させる指導を行う。 ・実験・観察を通して探究活動を行い、課題を主体的に発見、解決する能力・態度を育てる。	・生徒の気付きを促す発問を工夫する。 ・身近な事象や日常生活との関わりを教材に取り入れる。 ・探究型の実験・観察を多く行うよう工夫する。 ・ドライラボを含め、情報を整理し考察させる経験をさせる。	・基礎・基本の定着とその活用能力を高める授業を展開する。 ・探究の過程・結果・考察を自分の言葉で表現する力を養う授業展開。

	課　　題	本年度の目標	具体的方策	研究主題
保健体育	・コミュニケーション能力を高める指導。 ・主体的・積極的な運動の実践を通して、楽しみながら知識や技能、体力を高める。 ・現代社会や自らの健康課題について考えさせる。	・新体力テストにおける体力ポイントの低い項目の強化を図る。 ・健康の保持増進のための知識、意志決定にもとづく適切な行動選択ができる能力を育てる。	・各種目と系統づけた体力を高めるための運動を継続して実践する。 ・練習方法や戦術等について、効果的に話し合いの機会や場面を設ける。 ・生徒の運動能力、興味や関心の現状を把握し、理解を深めるための教材や場づくりを工夫する。	・授業を通じた規律の定着と生徒の主体的な活動によって、健康的な将来につながる運動の実践。 ・ヘルスプロモーションの考えにつながる保健学習の充実。
芸術	・芸術への関心、意欲の喚起。 ・感性を高める指導。 ・豊かな情操を培う指導。	・芸術文化についての理解を深めさせ、生涯にわたって愛好する心情を育む。 ・感性を高め、心豊かな生活や社会を創造していく態度を養い、豊かな情操を養う。	・芸術の幅広い活動の中に言語活動を適切に位置づけられるよう工夫する。 ・表現と鑑賞の相互関連を図りながら、能動的に学習を深められるよう工夫する。	・芸術を理解する喜びを感じられる指導。 ・感性と表現力の育成。
英語	・新学習指導要領に対応した授業をどのようにして作っていくか。 ・基礎学力をいかにして身につけさせるか。	・授業は英語で行う。 ・基礎基本の反復学習によって、語彙力と表現力を身につけさせる。 ・英語検定を奨励する。	・授業中に教師や生徒が英語を用いる場面をできるだけ多く作る。 ・増田高校英語科 Can-Do リストを作成にむけて検討を重ねる。 ・授業時において検定用の練習問題等の指導を行う。	・英語を使い、使わせる授業の実践と教授法の工夫。 ・増田高校 Can-Do リストの作成の工夫。
家庭	・自己の生活から課題を見出し、いかにして解決策を考える能力を身につけさせるか。	・資格取得の奨励ときめ細かい指導。 ・発問を通して、生徒の考えを引き出す。 ・問題解決するための基礎力として、知識と技術の定着を図る。	・日常生活に密着した実技や実習を取り入れる。 ・実生活に即した例題の提示や発問をする。 ・ワークシートや教材の開発。	・学んだ知識や技術が、実際の生活に生かされるような指導の工夫。 ・実物見本の提示の仕方、教材の工夫。
福祉	・主体的に学ぶ態度の育成。 ・基礎的・基本的な知識と技術の習得。	・福祉に関する基礎的な知識と技術を習得し、福祉の心を育成する。 ・社会福祉への関心を高めさせる。	・教材の工夫と精選。 ・体験的な学習を効果的に取り入れた授業の展開。	・生徒の成長段階や興味関心に合わせた事例の選定と展開。
情報	・情報を収集、加工、発信し問題解決につなげるためにコンピュータを活用できる生徒の育成。	・コンピュータを用いて問題を解決する能力の育成。	・問題解決に重点を置きながら同時に操作を習得する課題設定。	・生徒が自ら問題を見つけ、解決しながらプロジェクトを完成させる情報教育。
商業	・基礎的・基本的な知識と技術の習得。 ・経済活動や社会に対する興味・関心の喚起。	・自ら学ぶ意欲を向上させる。 ・資格を取得するために主体的に取り組む態度を身につけさせる。 ・地域産業への関心を高めさせる。	・教材の工夫・精選。 ・授業を通じた規律指導。 ・資格取得に向けた対策強化。 ・外部機関との連絡強化。	・ビジネス場面を想定し、即座に対応する実践的な能力を育成させる。 ・経済社会の発展に主体的に貢献する意欲を向上させる。
農業	・実験実習において指示待ちの姿勢があり、主体的に実習に取り組む姿勢が不足している。	・教材としての農場の活用や地域連携等のイベントを通して、効率的な運営や方法など、主体的に取り組ませることで実践力を身につけさせる。	・実習や地域連携等において生徒に内容や方法について考えさせ、取り組ませる。 ・生徒の積極的な発言や話し合いを促し、実習内容を共有させる。	・実習や地域交流を通した生徒の主体的態度、実践力の涵養を促す指導法の工夫。

8　学年部指導

	学年目標	重点目標	具体的方策
1学年	高校生としての基本的生活習慣・学習習慣を確立し、将来の進路を模索しながら適切な進路目標を設定する。また、社会において求められるコミュニケーション能力を養う。	1　生活三信条を徹底し、基本的な生活習慣を確立させるとともに、高校生として必要な学習習慣を確立する。 2　適切な進路目標を設定させ、その目標達成に向けて主体的に情報収集、学力向上に取り組ませる。 3　学校生活や学外での活動に積極的に取り組ませ、望ましいコミュニケーション能力を育成する。	1について ・時間厳守、提出物の期限を中心に生活三信条を意識して生活を送らせる。 ・中学校の復習と遅刻防止を目的に、計画的に教材を選択して朝学習を実施する。 ・思いやりの心や感謝する心を様々な指導の中心において生活指導をしていく。 ・適切な課題を与え、予習を前提とした授業を展開することで家庭学習習慣を定着する。（英･数･国の授業の初回、ガイダンスを行い、学習方法、予習･復習の仕方について説明する。） 2について ・進路希望を明確にした上で系列選択ができるよう、適切に支援していく。 ・「産業社会と人間」、「アグリ・ナビ」を活用してキャリア教育を推進する。 3について ・生徒会行事､学校行事に取り組む上で、協力することの大切さを教える。 ・学校生活において、他者と意見を交換する場面や、自分の意見を発表する場面を通して、コミュニケーション能力を育成する。。 ・地域でのボランティア活動に積極的に参加させ、地域理解とコミュニケーション向上に役立たせる。
2学年	中堅学年にふさわしい基本的生活習慣・学習習慣を確立し、将来の進路目標を明確に設定する。また、社会人・職業人として必要なコミュニケーション能力を養う。	1　日々の授業と家庭での予習・復習を大切にさせ、更なる学力の向上を図る。 2　実力に相応した、より高い進路目標を設定させ、その実現に向けて進路情報の研究と実力養成に取り組む。 3　インターンシップや修学旅行等の様々な体験活動を通して、望ましい職業観やコミュニケーション能力を育成する。	1について ・計画的に教材を選択して、朝学習を有効に活用する。 ・各教科と連携し小テストを定期的に実施する。 ・長期休業、週末等の課題の充実・適量化を心掛け、家庭学習の充実を図る。 ・模擬試験の事前・事後指導を徹底する。 ・課題研究を通して、課題解決能力を身につけさせる。 2について ・個人面談（年２～３回）により生徒の進路希望を把握し、適切な支援をする。 ・進学希望者に対して、長期休業中のオープンキャンパスへの参加を促す。 ・進路ガイダンス等を実施し、進路意識の高揚を図る。 ・進路指導部の「面接カード」を活用して、教職員間の連携を図る。 ・三者面談、保護者面談を実施し、保護者の意向を確認する。 3について ・インターンシップの事前・事後指導を徹底する。 ・修学旅行に向けた事前学習を充実させる。 ・課題研究を通して、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力を育成する。

	学年目標	重点目標	具体的方策
3 学 年	個々の生徒が最上級学年としての責務を果たしつつ、自己の進路目標の達成に向けて最後まで全力で取り組み、進路実現できるようにサポートする。	1　日々の授業と家庭での予習･復習により基本を定着させ、補習等を通じて実戦的能力を充実させて、進路達成に必要な学力の定着を図る。 2　保護者との連携を密にして、生徒の学習へのモチベーションを保ち、進路達成につなげる。 3　社会人として必要なコミュニケーション能力と自己管理能力を身につける。	1について ・朝学習・朝補習の内容を精選し、基礎事項の定着を図る。 ・放課後補習、添削により、実戦的な学力の養成を図る。 ・グリーンタイム等を活用して希望進路別の学習を行う。 2について ・個人面談により生徒の進路希望を把握し、適切な支援をする。 ・進路指導部の｢面接カード｣を活用して、教職員間の連携を図る。 ・全県総体後に進路講演会を行い、学習中心の生活への切り替えを図る。 3について ・面接指導、志願理由書の指導を通して、適切な表現力やコミュニケーション能力を育成する。 ・課題研究の立案、実施、まとめ、発表のプロセスを通じて、コミュニケーション能力と表現力の育成を図る。

９　校外研修計画（総合教育センター）

講座番号	講　　座　　名	職　名	氏　　名	教　科
Ａ０３	初任者研修講座（高等学校）	教　諭	福　田　菜　摘	家　庭
Ａ０７	実践的指導力習得講座（高等学校２年目）	教　諭	照　井　佳那子	国　語
Ａ１７	実践的指導力向上研修講座（高等学校８年目）	教　諭	小　原　拓　磨	保健体育
Ａ１７	実践的指導力向上研修講座（高等学校８年目）	教　諭	齊　藤　浩　幸	家　庭
Ａ２２	中堅教諭等資質向上研修講座（高等学校 10 年経過）	教　諭	永　須　裕　貴	保健体育
Ａ２６	県立学校新任校長研修講座	校　長	坂　本　寿　孝	農　業
Ａ３３	高等学校新任学年主任研修講座	教　諭	大　沼　明　子	英　語
Ａ４２	高等学校講師等研修講座Ａ	臨時講師	髙　橋　哲　平	農　業
Ｂ０１	各教科等の指導における言語活動の充実	教　諭	照　井　佳那子	国　語
Ｂ１２	情報教育推進研修講座	ＩＣＴ委員会より委員が出席		

１０　校内研修計画

・校内職員研修　　第１回：　①　5/18　②　5/19　【救急救命講習】
第２回：　6/23【生徒理解】
第３回：10/　6【特別支援】
第４回：12/22【不祥事防止】

・授業見学研修　　年間を通じて、他教科・自教科の授業見学をそれぞれ１回以上行う。

・授業研究会　10月18日（月）【指導主事訪問】
1ヶ月前課題について、各教科毎に授業研修等を通じて課題解決に向けた取り組みを行う。

・年次研修者の研修報告

校内職員研修

令和３年度　第１回校内職員研修会　要項

環境保健部・研修部

１．内　容　　救急救命講習　　・ＡＥＤの使用方法
　　・心肺蘇生法

２．講　師　　横手市消防署南分署　署員３～４名

３．目　的　　平素の生徒の不調への対応ができるようにするとともに、２学期の体育的行事での緊急を要する生徒の不調に対応できるようにする。

４．対　象　　増田高校職員全員

５．期　日　　１学期中間考査期間中の午後

①　令和３年５月１８日(火)　　13:30 ～ 15:00
②　令和３年５月１９日(水)　　13:30 ～ 15:00
＊ いずれかの研修を選択し受講してください。

６．会　場　　第１体育館

７．役割分担　　渉　外　：　環境保健部
　　司　会　：　環境保健部・研修部
　　講師対応：　養護教諭

８．次　第

(1)　開会
(2)　実技研修
(3)　質疑応答
(4)　謝辞(管理職)
(5)　閉会

９．その他　　当日は、ジャージ等動きやすい服装で参加してください。

令和3年度　第1回校内職員研修会　「救急救命講習」　R3.5.18/19

開　会　式

講　師　挨　拶

消防署員による模範演技

実　技　演　習

令和３年度　第２回校内職員研修会　要項

研　修　部
教育相談部

１　目　　的　　特別な配慮や支援が必要な生徒について、情報を共有し共通理解を図ることで、特別活動時や放課後、部活動等での不測の事態にも全職員が対応出来るようにする。

２　対 象 者　　増田高校教職員

３　開催日時　　令和３年６月２３日（水）　　放課後１５：４５～１６：３０

４　場　　所　　会議室

５　方　　法　　各学年部から事例を説明後質疑応答。
各学年部からの事例は３件程度とし、説明時間はおよそ１０分とする。
生徒の状況や必要な支援・配慮・対処法を説明する。

＊各学年部は学年部会等で
事例発表する生徒について
事前に協議し、まとめて
おいて下さい。

タイムテーブル

開　会	１分
１年部	１０分
２年部	１０分
３年部	１０分
質疑応答	１０分
校長先生から	３分
閉　会	１分

６　そ の 他　　プライバシーを考慮し、レジメは作成せず、口頭説明のみとする。
必要に応じてメモをとっても良いが、その場合は、各自の責任で厳重に管理する。

第２回　校内職員研修会　記録

日　時 ：令和３年６月２３日（水）　１５：４５～１６：３０

場　所 ：会議室

参加職員：３２名（校長 1・教頭 1・教諭 29・臨時講師 1）

内　容 ：生徒理解

方　法 ：各学年部より支援や理解を必要とする生徒の事例を報告後質疑応答

【 報 告 】

各学年より共通理解の下に支援や指導を要する生徒の現況が報告された。
中学校等からの申し送り事項や指導事例､及び家庭から依頼された要望等も提示された。

【校長先生から】

今日の研修会の内容は、非常に勉強になった。
情報の共有は非常に有効である。情報を集め、分析し、理由の見立てには発想力や想像力が求められる。
既に、１年生には進路変更をした生徒もおり、生徒理解や生徒指導の難しさを感じていた。共有した情報を今後、組織的にいかして取り組んでほしい。

令和３年度　第３回校内職員研修会　要項

研　修　部
教育相談部

１　目　　的　　中学時、特別支援教室等で指導を受けた生徒の入学に伴い、特別な配慮や支援を必要とする生徒が増えている。一斉授業や実習等でどのような点に配慮し、支援できるのか、その方法を学び今後の指導に役立てる。

２　対 象 者　　増田高校教職員

３　開催日時　　令和３年１０月６日（水）　　放課後１５：４５～１６：４５

４　場　　所　　会　議 室

５　講　　師　　秋田県立角館高校定時制課程　教育専門監　菅原　吉伸 氏

５　そ の 他　　講話は５０分程度を予定し、その後、１０分程、質疑応答の時間をとる。

第３回　校内職員研修会　記録

日　時 ：令和３年１０月６日（水）　１５：４５～１６：５０

場　所 ：会議室

参加職員：３２名（校長 1・教頭 1・教諭 29・臨時講師 1）

内　容 ：特別支援理解

方　法 ：角館高校定時制　教育専門監による講話

〈　記　録　〉

＊別紙資料あり

概　要：特別支援教育は一部の対象生徒のみならず、すべての生徒に活かせるもの。

「発達障害」と診断されても、薬では治らないもので、一生付き合う特性であり、それぞれの特性にあった指導が必要となる。

なぜ、診断名が必要になるのか。

・小中学校で特別支援教育を受ける場合

・就労の際に支援枠で就職する場合

支援の第一歩は、生徒の行動の理解から。ぎこちない自己表現（サイン）は誤学習による場合がある。

犯罪が生じたときに、発達障害の有無が問題視されることもあるが、犯罪は、発達障害によって起こるのではなく、二次障害として引き起こされていることが多い。

一般的に、視力が落ちるとめがねをかけるように、何か手立てがあればできる。発達障害により、視力が弱かったり、板書のスピード遅かったり、注意力が欠けて要る場合など、すべて板書させるのが困難な時には、大事な 1 行を指示して書かせるなど。

バリアフリーが進むのは、合理的な配慮により社会的障壁が改善された結果であり、障害を持つ人が自身の困り気づき、周囲に発信することが大事になってくる。本人が発信できないようならば、学校では周囲が発信のチャンスを与え、その結果事態が好転していくということを体験させることが、今後社会に出て行くための準備となる。

「平等」と「公正」の違い・・平等であることが配慮とは限らない。すべての人に同じように機会が与えられることが「公正」である。そのためのユニバーサルデザインが大切である。

生徒への声かけも同様である。
廊下を走っている生徒に「廊下をはしらないでください。」と注意しても、生徒によっては、その解釈が様々である。「廊下は歩いてください。」と声をかけた方がより適切である。

事前質問への回答

質問１）特別支援教室で個別指導を受けてきた生徒を、高校の一斉授業の中で指導する際の一般的な留意点や配慮事項

回　答）中学校からの伝達されている配慮事項を引き継ぐ。
中学校での高校進学に向けての交流学級での活動の様子を参考にする。

質問２）特別支援を受けてきたＡ君への担任の対処方は適切であるかどうか。

回　答）対応の概要として良いが、理解できなかった場面で、本人がどのようにつまづいているのかを担任が確認すると良い。
自分で考える場面で、話された内容をきちんと理解していたかがポイント。
友人に尋ねる場合、その友人が適切な人材であったかがポイント。
経験させる中で、成功体験を積ませることが次につながる。
（例）友人に聞いて理解できた時、「聞いて良かった」という体験など。

質問３）緘黙や場面緘黙傾向のある生徒に対する進路指導において、配慮する点や私たちができることは何か。

回　答）中学校からに引き付き事項を踏まえ、今行っている指導を進路先の学校や事業所へ引き継いでいく。

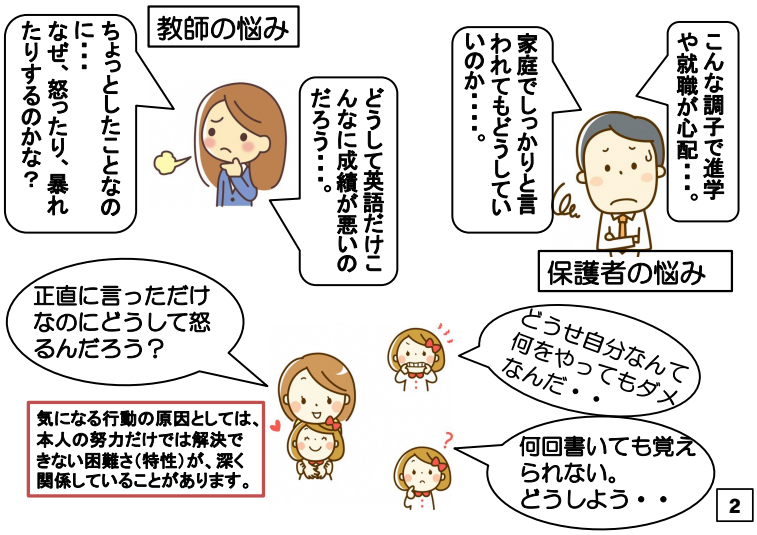
校長謝辞：コロナ禍の様々な制約の中で、最大の教育効果を上げるために日々、試行錯誤している。
特別支援教育を受けてきた中学生の本校への入学が年々増えており、この観点からの指導の必要性も生じている。本日の研修は大変参考になる講話であり、感謝申し上げる。生徒の立場になる大切さを改めて感じた。

令和3年度　特別支援教育に関する校内職員研修　　増田高等学校

特別な配慮が必要な生徒への支援
～よき理解者・支援者となるために～

令和3年10月6日（水）
角館高校定時制課程　　菅原吉伸

発達障害のある生徒の「よき理解者・支援者となるために」



2

発達障害のある生徒の「よき理解者・支援者となるために」

問題の改善を図るには、周りの人が発達障害について知ることが必要です。

- ●それぞれの障害は、特性を示す「障害名」で「病名」ではない。
- ●薬で治す「病気」ではなく、その人が一生付き合っていく「特 性」。
- ●特性によって、社会生活を送る上で「支障や不都合」が生じるようであれば、「障害」の診断が必要。
- ●たとえ診断名が同じであっても、一人一人の特性の現れ方は異なる。
- ●「特性」は本人の一部であって、すべてではない。
- ●成長段階における周囲の支援（関わり方）によって、本人の状態が大きく変化する。（良くも悪くもなる）

3

発達障害のある生徒の「よき理解者・支援者となるために」

一番苦しみ悩んでいるのは、生徒自身です。
生徒の立場に立ち、「どんなことにつまずいているのか」「なぜ、問題行動が起きたのか」など考えることが、発達障害について知ることの第一歩です。

⇩

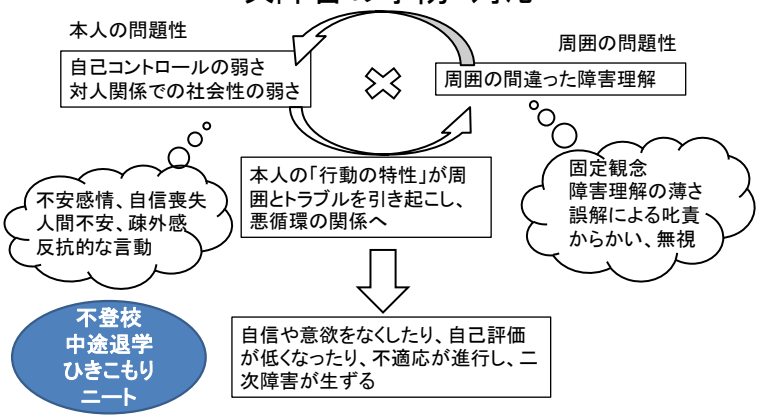
支援の第一歩は、生徒の行動を理解すること

- ・「行動」には必ず「背景」がある。
- ・一見「問題行動に見える行動」は、自分を守るため、周囲との関係を保つために行ってきた「誤学習の結果」である。
- ・生徒のぎこちない自己表現で発する「サイン」に気づき、その背景を探ることが大切である。
- ・日常的な「気づき」「特性の理解」「可能な支援の発見」が必要である。

4

発達障害のある生徒の「よき理解者・支援者となるために」

二次障害の予防・対応



二次障害を解決するためには、大変なエネルギーが必要。二次障害が現れる前に適切な支援を行い、予防することが重要。

5

発達障害のある生徒の「よき理解者・支援者となるために」

クラスの気になる子どもたち

気になる（対応に困る）子＝「困っている子」

- ・いつも失敗ばかり
- ・うまく伝えられない
- ・分かってもらえない

⇩

しつけやわがままではなく、本人の**特性**が原因

特別な支援 → あたりまえの支援

6

- 「発達障害」とは、自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するものとして政令で定めるものをいう
- （発達障害者支援法：H17．4施行、H28一部改正）

・発達の偏り
・知的な遅れのある方もいれば、
・知的な遅れのない方（目立たない方）もいる

7

発達障害の特性

8

障害の理解

- 障害名（診断名）は子どものプロフィールの一部
- 障害特性の理解は必要

しかし、それだけで子ども理解はできない。
障害名にとらわれ、本当の姿が見えなくなることもある。

※私たちの仕事は、診断ではない。
診断名はないが、
支援が必要な子どもがクラスには存在する。

9

インクルーシブ教育システムとは

障害者の権利に関する条約第24条によるとインクルーシブ教育システムとは、人間の多様性の尊重の強化、障害者が精神的および身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とするとの目的の下、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組みであり、障害のある者が教育制度一般から排除されないこと、自己の生活する地域において初等中等教育の機会が与えられること、個人に必要な「合理的配慮」が提供される等が必要とされている。

10

合理的配慮の対象

・身体障害、知的障害、精神障害（発達障害含む）その他の心身の機能の障害があるものであって、障害及び社会的障壁により継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける状態にあるもの。

・障害者が日常生活又は社会生活において受ける制限は、障害のみに起因するものではなく、社会における様々な障壁と相対することによって生ずるとするいわゆる「社会モデル」の考え方を踏まえている。

・法が対象とする障害者はいわゆる障害者手帳の所持者に限られない。

「文部科学省所管事業分野における障害を理由とする差別の解消の推進に関する対応指針文部科学省」2016

11

合理的配慮の提供プロセス　（ガイドラインP11）

幼児児童生徒や保護者から、合理的配慮の申請（意思の表明）があったときには、管理職や特別支援教育コーディネーターを交えて、園・校内委員会や個別ケース会議において速やかに対応を検討し、幼児児童生徒や保護者との相談を進め、合意形成を図るように努める。

意思の表明	・幼児児童生徒や保護者からの意思の表明※ ・必要に応じて学校側からの提案
調　整	・本人・保護者からの希望・意見の聞き取り ・実態把握 ・校内委員会（ケース会議）での検討（変更・調整案や代替案の検討）
決　定	・本人、保護者との合意形成 ・評価と柔軟な見直しについての共通理解 ・個別の支援計画等への記載
提　供	・全ての教職員での共通理解 ・合理的配慮の提供
評　価	・本人・保護者との振り返り ・「子どもが十分な教育を受けられるために提供できているか」という観点から評価
見　直　し	・校内委員会（ケース会議）での検討 ・提供した合理的配慮の実行性、有効性等の評価・検証 ・提供する合理的配慮の見直し案の作成等
引　継　ぎ	・就学先・進学先・転学先・就職先への引継ぎ

PDCAサイクル

12

ユニバーサルデザインの視点による授業とは？

「より多くの生徒にとって分かりやすい授業」

◯配慮の必要な生徒　→「なくては困る支援」
◯多くの生徒にも　　→「あると便利な支援」

教科指導の工夫　＋　特別支援教育の視点での配慮

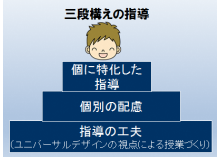
⇩

ユニバーサルデザインの視点による授業

13

授業のユニバーサルデザイン

- 学力の優劣や発達障害の有無にかかわらず、全員の子どもが楽しく『分かる・できる』ように工夫・配慮された通常の学級における授業デザイン



※工夫～「授業づくりの『工夫』」
　→教科指導からのアプローチ

※配慮～「個別の『配慮』」
　→特別支援教育からのアプローチ

14

15

授業づくりのポイント（キーワード）
～授業のユニバーサルデザイン化～

1　焦点化（シンプル）
- 本時のねらい・活動の流れを示す
- 学習を細かいステップに分ける（小さな成功体験）
- 何をどこまでするのか、終わったらどうするのかを明確にする

2　視覚化（ビジュアル）
- 手本、見本、模型、完成図を示して、イメージをもたせる
- 学習過程が分かるように板書を工夫する
- 注目させたい部分は強調して提示する

3　共有化（シェア）
- 子どもの望ましい発言や行動を評価・賞賛する
- 個人思考から集団思考へつながるように工夫する
- 多様な方法で表出させる機会を設定する

16

◯個性を認め合うホームルームづくり
一人一人得意不得意はあり違うことを受け入れて…

◯クラス全体でのルールを明確に
対象の生徒に対してだけではなく…

◯「分かりやすい授業」とは
単に「難易度を下げること」ではなく、取組の手段や方法を分かりやすくしたり、取組の過程を細分化したりして、共通のゴールを目指すような支援

◯学校全体がチームとなってぶれない指導を
特別支援教育は「チームで当たる」が基本
生徒指導との区別が難しいケースが多い
→共通理解して方針を一本化することが必要

17

教師のプラスの関わりで情緒の安定を

- ほめる「いいね」「グッド」「すごいね」
- 興味や関心を示す「どこが上手くいった？」
- 次の活動に誘う「一緒に　やろう」
- 励ます「あと少し」「もうここまできたの」
- 気づく「〇〇しているんだ！」
- 気遣う「どんまい」「どうしたの」「大丈夫?」
- 感謝する「ありがとう」「助かったよ」
- 喜ぶ・驚く「もう準備したの?」「早くてびっくりした！」
- ｼﾞｪｽﾁｬｰ「うなずく・手を振る・拍手」「OK!サイン」
- ｽｷﾝｼｯﾌﾟ「そっと肩に触れる」「握手」「ﾊｲﾀｯﾁ」

ほめる＆認める

18

ほめるとは？

ほめる＆認める

ほめるに含まれること
①ほめる　②感謝する　③励ます
④興味・関心を示す　⑤気付く

「ほめる」とは、あなたが子どものよい行動に「 **気付いている** 」ことを伝えることです。

ほめ方のポイント　どこをほめる？　何をほめる？

○「できて当たり前」と思うようなことを　ほめる。
・「おはよう」と　あいさつできた
・自分で提出物を出した
☞**ハードルは低く（今やれていることからほめる）**

○全部できていなくても、一部でもほめる
・掃除を始めようとしたら・・・はじめ
・掃除をしている最中に、ほめる・・・途中
・掃除が終わったら、ほめる・・・終わり
・机を一つでも運ぼうとしたら、ほめる・・・はじめ
・（最後の一つ以外は大人が手伝って）最後の一つだけ机を運んだら、ほめる・・・終わり

○例外の時（いつもはやらないのに、たまにやったとき）に見逃さずほめる

上級テク「　時間差　ほめ」

ほめる＆認める

・その場ですぐにほめる「即時評価」

↓

・時間を空けてからほめる「遅延評価」
「そう言えばあのとき・・。こういうことをしてくれたようだね」

↓

・ほめるを徐々に間引きして行く「間引き評価」

↓

・ゴールは「ほめられなくても行動する子に育てる」

あいまいな言葉は子どもを　不安　にする

・はやくしなさい。
・勝手にしなさい。
・ちゃんとしなさい。
・きちんと片付けて。
・なんでできないの。
・もう少し、待って。
・自分の物を大切にしなさい。
・いい加減にしなさい。
・しっかりして。
・やる気を出して。

よく耳にする(発する)こんな言葉

「何やってるの！」

「なんで言ったことを聞いていないの？」

「いつまでしゃべっているの？」

⇩

するべき作業(活動)を具体的に示したり促したりする

うまく人間関係をとれない生徒に

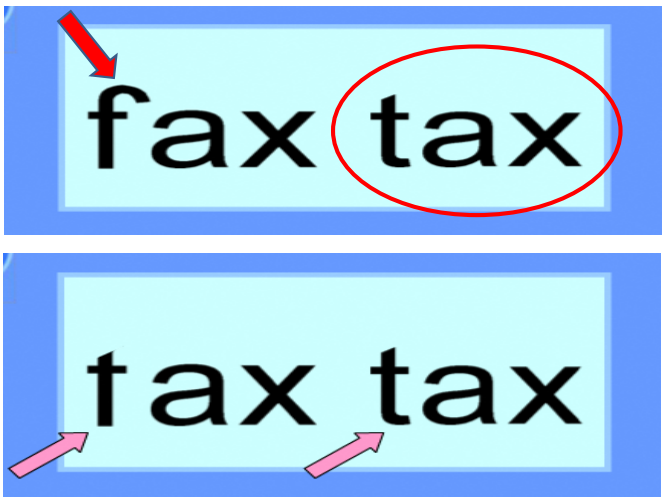
目の前の人にどう関わったらよいか分からず、「誰でもいいから話しかけてみたら」と言われても・・・

「おはよう」「こんにちは」

「どうぞ」→「ありがとう」→「どういたしまして」

※日常生活の中で意図的に場を設定する。
※流行語を知っておくと友だちとの会話で話題に乗れることもある

文字の認識（必要な部分・不要な部分）



25

特別支援教育に関わる法令等

○新高等学校学習指導要領　総則　第5款

２　特別な配慮を必要とする生徒への指導　（1）　ウ

障害のある生徒などについては、家庭、地域及び医療や福祉、保健、労働等の業務を行う関係機関との連携を図り、長期的な視点で生徒への教育的支援を行うために、個別の教育支援計画を作成し、活用することに努めるとともに、各教科・科目等の指導に当たって、個々の生徒の実態を的確に把握し、個別の指導計画を作成し活用することに努めるものとする。特に、通級による指導を受ける生徒については、個々の生徒の障害の状態等の実態を的確に把握し、個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成し、効果的に活用するものとする。

26

新高等学校学習指導要領解説

総則編　～特別な配慮を必要とする生徒への指導より～

障害のある生徒などの指導にあたっては、担任を含む全ての教師間において、個々の生徒に対する配慮等の必要性を共通理解するとともに、教師間の連携に努める必要がある。

今回の改定では、総則のほか、各教科等においても、「各科目にわたる指導計画の作成と内容の取り扱い」等に当該教科等の指導における障害のある生徒などに対する学習活動を行う場合に生じる困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫を組織的・計画的に行うことが規定された。

27

新高等学校学習指導要領解説

国語編

～「各科目にわたる指導計画の作成と内容の取り扱い」～

例えば、国語科における配慮として、次のようなものが考えられる。

・自分の立場以外の視点で考えたり他者の感情を理解したりするのが困難な場合には、生徒が身近に感じられる文章（例えば、同年代の主人公の物語など）を取り上げ、文章に表れている心情やその変化等が分かるよう、行動の描写や会話文に含まれている気持ちがよく伝わってくる語句等に気付かせたり、心情の移り変わりが分かる文章の中のキーワードを示したり、心情の変化を図や矢印などで視覚的に分かるように示してから言葉で表現させたりするなどの配慮をする。

28

新高等学校学習指導要領解説

国語編

～「各科目にわたる指導計画の作成と内容の取り扱い」～

・比較的長い文章を書くなど、一定量の文字を書くことが困難な場合には、文字を書く負担を軽減するため、手書きだけではなくICT機器を使って文章を書くことができるようにするなどの配慮をする。

・声を出して発表することに困難がある場合や、人前で話すことへの不安を抱いている場合には、紙やホワイトボードに書いたものを提示したり、ICT機器を活用して発表したりするなど、多様な表現方法が選択できるように工夫し、自分の考えを表すことに対する自信がもてるような配慮をする。

29

新高等学校学習指導要領解説

情報編

～「各科目にわたる指導計画の作成と内容の取り扱い」～

例えば、共通教科情報科における配慮として、次のようなものが考えられる。

・コンピュータ等の画面が見えにくい場合には、情報を的確に取得できるよう、文字等を拡大したり、フォントを変更したり、文字と背景の色を調整したりするなどの配慮をする。

・コンピュータ等の発する音が聞き取りにくい場合には、情報を的確に取得できるよう、音の代わりに光や振動、画面上の表示で伝えたり、スピーカーを適切な位置に設置したり、また、音量の調整やヘッドホンの使用などの配慮をする。

30

新高等学校学習指導要領解説

情報編
～「各科目にわたる指導計画の作成と内容の取り扱い」～

・**キーボードによる文字の入力やマウス操作等の動作に困難がある場合**には、コンピュータ等の操作が可能となるよう、レバー操作型のコントローラーなどの入力手段を使えるようにするなどの配慮をする。

レ**コンピュータ等の画面上の文字を目で追って読むことに困難がある場合**には、どこを読んでいるのかが分かるよう、読んでいる箇所をハイライト表示や反転表示するなどの配慮をする。

レ**コンピュータ等を扱いながら、指示を聞くことに困難がある場合**には、同時に二つの作業が重なることがないよう、まずは手を止めるよう指示をしてから次の話をするなどの配慮をする。

31

新高等学校学習指導要領解説

情報編
～「各科目にわたる指導計画の作成と内容の取り扱い」～

レ**集中して学習を継続することが難しい場合**には、見通しをもって学習に取り組めるよう、学習活動の手順を視覚化して明示したり、スモールステップで学習を展開できるようにしたりするなどの配慮をする。

レ**自ら問題解決の計画を立てたり設計したりすることが難しい場合**には、生徒が学習に取り組みやすくなるよう、あらかじめ用意した計画や設計から生徒が選択したり、それらの一部を改良する課題に取り組めるようにするなど、段階的な指導を行うなどの配慮をする。

32

まとめにかえて

○人はマイナス面に目が向きがち
生徒のよいところを見ようとする気持ちをもち続けることが大切

○一人一人の特技(強み)を発揮できるような共生社会へ
☞ 一人一人のよさを生かして活躍する社会

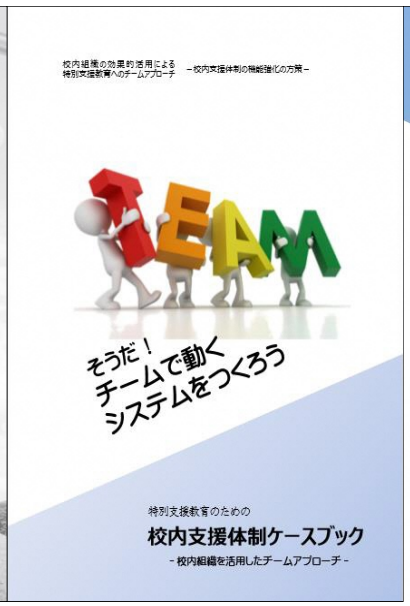
33

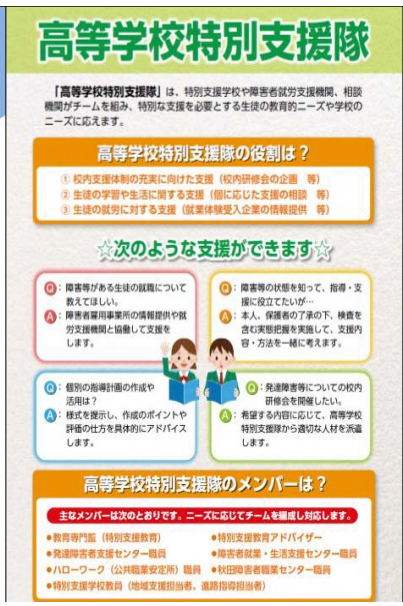
まとめにかえて

○生徒のつまずきや困っている事実を
共感的に理解する
・どの生徒も(多かれ少なかれ)得意・不得意がある
・発達障害のある生徒の場合、それが顕著に現れる
・本人の得意な分野やよさを生かす

生徒がつまずいたり、困ったりすることが想定される場面における対処の仕方を教える
→ **本人の自己理解 (自覚と工夫)**

34





令和３年度　第４回校内職員研修会　要項

研　修　部

１　目　　的　　事例検討を通じ、相互に意識を喚起することで、組織的に不祥事防止に努める。

２　対 象 者　　増田高校教職員

３　開催日時　　令和３年１２月２２日（水）　　職員会議終了後　５０分間程度

４　場　　所　　会議室

５　講　　師　　坂本　寿孝 校長先生

６　方　　法　　小グループによる演習と講話

７　そ の 他　　４人程度でグループを形成

第４回　校内職員研修会　記録

〔 事 例 〕

９月下旬、〇〇高校に、東京の△△株式会社から、就職希望の生徒Ａに対する試験日程や試験会場を通知する文書が書留速達で届いた。開封した採用１年目のＢ事務主事は、たまたま事務室に来た生徒Ａの担任であるＣ教諭にそのまま封筒を渡した。ところが、試験当日、当該高校に会社から生徒Ａが試験を受けなかった旨の連絡があった。高校で確認すると書類が生徒に渡っておらず、生徒Ａは憧れの会社の社員になる夢が叶わなくなってしまった。

ステップ１

〇事例を読み、ポイントと思われる箇所にアンダーラインを引いてみましょう。

〇何が問題だったのか、箇条書きにしてみましょう。

ステップ２

〇各班で、率直に意見を出し合いましょう。また、次のことについて、班の考えをまとめましょう。

・この後、どう対応していけばよいでしょう。

・このような問題が起こるとどのような責任が問われるか。

・進路や学事関連文書の不適切な取り扱いを防ぐために組織としてどのような対策をすべきか。

ステップ３

〇各班から発表し、共有しましょう。

◇各班より出された事例における問題点　　〔ステップ１〕

・担任に進路関係の文書が直接渡されている。(文書の流れのマニュアルを守っていない)
・校長や進路主事を通していない。文書が届いたことを関係分掌等と情報共有していない。
・封筒を空けた事務主事が、渡す際に何の封筒なのか伝えていない。主事はそもそも中身の確認をしていたのか疑問。
・書留速達であるのに、渡された担任がすぐに対応していない。
・学年部・進路指導部のセーフティーネットが機能していない。
・受験等のスケジュール管理ができていない。組織としてのコミュニケーション不足。
・担任は、応募書類発送後、通知文書が届いていない、と企業に確認をしていない。
・生徒に渡していない。
・生徒自身の問題意識が低い。

◇各班より出された対応・責任・対策　　〔ステップ２・３〕

①問題への対応
・管理職に報告し、対応を協議
・本人、保護者への謝罪と説明
・企業への謝罪と再受験のお願い

②責任
・道義的な責任が生じる。
・賠償責任が生じる可能性がある。
　慰謝料、進路活動に掛かった経費等。

③組織としての対応
・情報を共有できる組織体制の見直し。マニュアル・作業工程のフローチャート作成。
・事務手続きの研修。経験の浅い職員へのサポート体制の確立。チェック体制（複数の目）の強化。
・職員間で相談しやすい（聞きやすい）雰囲気作り。

令和3年度

第2回指導主事訪問

１．訪　問　日

令和３年１０月１８日（月）

２．訪　問　者

高　校　教　育　課	指導主事	小松　隆行　先生	（公　　民）
高　校　教　育　課	指導主事	山城　　崇　先生	（理　　科）
秋田北高等学校	教育専門監	杉田　道子　先生	（英　　語）

３．当日の日程

	校時・時間		内　容	場所等
1	３校時	10:50 ～ 11:40	学校説明	◇場所：校長室
2	４校時	11:50 ～ 12:40	諸表簿閲覧	◇場所：会議室
		12:40 ～ 13:20	昼食	
3	５校時	13:20 ～ 14:10	全体の授業参観	要項ｐ．５参照
ＳＨＲ終了後、一般生徒は放課（部活動なし）				
4	６校時	14:30 ～ 15:20	研究授業	①公民　◇場所：１年１組教室 ②理科　◇場所：２年２組教室 ③英語　◇場所：２年３組教室
5		15:30 ～ 16:15	研究協議	①公民　◇場所：２０４教室 ②理科　◇場所：２０３教室 ③英語　◇場所：２０２教室 ※参観した授業の部会に参加する。
6		16:25 ～ 17:00	全体協議	◇場所：会議室 １　校長あいさつ ２　指導助言 山城　　崇　先生 小松　隆行　先生 ３　校長あいさつ

４．重点指導事項並びに本校の１か月前課題

＜重点指導事項＞

（１）組織で取り組む授業づくりの充実
・ねらいに基づいた授業構成
・生徒の思考を深める授業展開
・評価と検証に基づいた授業改善

（２）「こころ　姿　振る舞い　さわやか高校生運動」の推進による生徒指導の充実
・さわやかな整容
・さわやかな生活態度
・さわやかな学習環境

＜本校の１か月前課題＞

【課題】

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた組織的な授業改善

【現状と課題設定】

本校の生徒は大人しく遠慮がちであり、自らの意見を上手に表現することが苦手である。授業においても受け身の姿勢が見られ、積極的に発言する機会は少ない。自分の考えをはっきりと伝えることができる発言力や表現力を身につける必要があると考える。そのための「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた指導法の共有や検証を組織的に行う。

【具体的手立て】

１　本時の授業における到達点を明確にし、生徒が目的意識を持って授業に取り組むことができるように「本時の目標」の提示方法を工夫する。

２　授業形態を工夫したり、ＩＣＴ機器を活用することで協働的な学びの場を設定し、他者との関わりから自らの考えを深め、発言や表現する場面を設定する。

地歴公民科（現代社会）　学習指導案

日　　時 ： 令和３年１０月１８日(月)６校時
対 象 生 徒 ： 農業科学科　１年１組１６名
場　　所 ： １年１組　教室
指　導　者 ： 地歴公民科
使用教科書 ： 新現代社会（第一学習社）

１　単　元　名　　第３章　現代の民主政治と政治参加の意義
　　１２　地方自治と住民の福祉

２　単元の目標　　地方自治の意味と地方自治の発展のための課題について考える。
・政治とは何か。国と地方の両方を考えて、考察・理解することができる。
・地方公共団体の組織、住民による直接請求権など、基本的事項を理解することができる。
・選挙等に関する記事を読み、政治参加の意義について考察することができる。

３　単元と生徒

（１）生徒観　　男子生徒１１名、女子生徒５名、計１６名のクラスである。ほとんどの生徒は、授業がある当日までに Google クラスルームに告知された予習内容を整えて授業に参加している。予習を整えて授業に参加しているので、生徒たちは授業中、授業者の話をよく聞き、疑問に思ったことや理解できたりすることには反応よく頷いたり、声に出して授業に臨んでいる。普段は、明るく笑顔も多く見られる生徒たちだが、授業を参観される場面などでは畏まってしまうことが多い。

（２）教材観　　１８歳投票権を初めて実施した秋田県にとって、住民投票を授業で説明することの意義は大きい。また、衆議院議員選挙が実施されるこの時期において、参政権についても理解と知識を深めていきたい。２０歳前後の若者における投票率の低下が取り上げられている中、授業を通じて政治に参加することの意義と投票率の向上に結びつけていきたい。

（３）指導観　　選挙権・参政権については、指導する内容が他の単元より一層広範囲で中身が深い。要点を整理してわかりやすく説明したいと考えている。また、毎日のニュース等、身の回りの出来事に関連づけて理解力・思考力を高めていきたい。

４　単元の指導計画と評価計画（全２時間　本時　２／２）

	学習内容	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
1	民主主義の学校・地方自治の本旨・地方分権一括法について理解する	地方自治を学びつつ、秋田県や横手市の行政と重ね合わせて関心をもつことができる。	直接請求権・住民自治・団体自治などについて、身近な例をあげて考察することができる。	各班でテーマを決め、主体的に調べようとすることができる。	地方自治に関する基本事項について理解することができる。
2	住民投票・１８歳選挙権について理解する。	投票率の低下がどのような影響につながるか自分の意見をまとめることができる。	住民投票の事例について、要点を整理し表現することができる。	各班で決めたテーマについて、要点をまとめ、聞く人にわかりやすく伝える事ができる。	住民投票の種類を理解しつつ、政治に参加する意義について理解できる。

５　本時の計画（２／２時間）

（１）本時のねらい
住民投票には３つのタイプがあることを理解する。
１８歳選挙権年齢の引き下げを理解するとともに、政治に参加することの意義を考察する。

（２）展開

	学習活動	指導の留意点	評価
導入 ５分	・前時までの学習を振り返り、本時の流れを確認する。	・タブレットにログインできているか。 ・グーグルフォームを利用して、復習問題を解答する。	
	本時の目標：住民投票について調べ、理解しよう。		
展開 ４０分	住民投票には３つの種類があることを説明する。（１０分） ・各班で調べてきたことを発表する。 （各班４人前後） ①　秋田県岩城町における住民投票 ②　大阪都構想における住民投票 ③　１８歳選挙権年齢の引き下げについて ④　一票の格差とは・・・	・「憲法９５条」、「地方自治における直接請求権」、「条例による住民投票」の３種類を整理して理解することができる。 ・①～④を事前に調べ、各班で発表できるようにする。	住民投票の３つの種類について、根拠となる法令に関連づけて理解できる。 １８歳選挙権年齢の制度を理解しつつ、私たちの一票が政治に結びつくことを理解できる。
	（発問）投票率が低いとどうなるか		
	・秋田さきがけ新聞（R３/３/31）の記事をみて、投票率の低さが私たちの政治にどのように影響するかを考える。 ・考えた自分の意見・感想をスライドに記入する。	秋田県知事選挙の記事を読む。	
まとめ ５分	・本時の授業内容を振り返り、自分の意見を発表する。		

（３）目指す生徒の姿

住民投票の基本事項を理解しつつ、秋田県が全国に先駆けて１８歳投票権を実施した歴史があることを実感してほしい。また年代別投票率の低下が、私たちの生活や暮らしにどのような影響を及ぼすのかを「主体的に考察できる生徒」を目指したい。

令和3年度　研究協議会　記録

教　科（　地歴公民　）

研究授業実施日：令和３年１０月１８日(月)　６校時
科目・単元名　：現代社会・現代の民主政治と政治参加の意義
地方自治と住民の福祉

Ⅰ．授業者の感想

スタートから少し押してしまった。ただ、今日の授業に至るまで、生徒は授業や準備によくついてきた。住民投票で未成年であるが秋田県の高校生が初めて住民投票を行ったことを生徒は実感してくれたと思う。生徒はこれからの選挙についてよく考えてくれたのではないかと思う。

Ⅱ．参観者の感想

情報機器であるタブレットを復習に活用したり、電子黒板を利用して調べ学習の成果を発表する場面があった。意見を述べる場面でもタブレットを活用し、みんなが見れるようにしていた。また、発表に対して感想を記入する用紙も準備するなど主体的に学ぶ場面がつくられており、学びを深めるためＩＣＴの活用がなされていた。生徒自身が考えたことを発表したため、生徒自身の理解力が上がったと思われる。電子黒板を使ったことで、その場で共有もでき、授業も効果的にできた。

Ⅲ．授業改善に向けた提案

全体的に生徒の様々な意見を発表する場面をとった方がよかったのではないか。また、それに対する意見を出させるなど双方向のやりとりが生徒間でなされるとさらに良かった。今後、意見交換ができるような展開を期待します。話し合いの軸を焦点化させる構成にした方がより効果的な授業になっていく。「ねらい」と「発問」がずれているようなので、発問の内容を「ねらい」の中に予め入れておく構成にした方が本時の目標がより明確になっていく。

理科(化学探究①)学習指導案

日　　時 ： 令和３年１０月１８日（月）　６校時
対 象 生 徒 ： 総合学科２年２組
場　　所 ： ２年２組教室
指　導　者 ： 理科
使用教科書 ： 改訂版　新編　化学基礎（数研出版）

１　単元名　　第２編　物質の変化　　第３章　酸化還元反応

２　単元目標　　酸化剤や還元剤のはたらきと、そのときに起こる化学変化を化学反応式で表せるようになる。また、それをもとに酸化還元反応の量的関係についても理解する。

３　単元と生徒

(1)　生徒観　人文社会科学系列１６名、自然科学系列１０名の混合クラス（男子１１名、女子１５名）である。殆どが大学、短大、看護学校等への進学を希望しており、学習意欲の高い生徒も見られるが、全体的に大人しめで授業時に自ら発言する生徒は少ない。

(2)　教材観　酸化還元反応は中学校で酸素の授受による定義を学習しており、２学期はじめに、水素の授受による定義、電子の授受による定義を学習している。しかし、多くの生徒にとって電子による定義についてはなかなか実感できず、今のところ、言いくるめられているように感じている生徒も多いように思う。電流計を用いて、電子の移動を確認させることで、酸化還元反応が電子の移動であることを確認させたい。

(3)　指導観　週１時間の授業であるため、酸化還元の定義、酸化剤、還元剤について確認した上で授業を進める必要がある。演示実験から、酸化還元反応が電子の移動であることを確認させ、半反応式(電子を含むイオン反応式)からイオン反応式を導く方法について考えさせたい。

４　単元の指導計画と評価計画(全１８時間，本時　５／１８)

	学習内容	評　価　規　準				評価方法
		A　関心・意欲・態度	B　思考・判断・表現	C　技能	D　知識・理解	
第１～３時	酸化と還元	酸素との化合が酸化、酸素を失うことが還元であることを思い出す。	酸化還元反応には必ず電子の移動が伴うことに気付く。 酸化数を用いて酸化還元反応を考察できる。	化合物中の原子の酸化数を計算できる。	電子の授受が酸化還元の本質であることを理解している。	発言・発表 机間指導(ノート)
第４～８時(本時)	酸化剤と還元剤	金属イオンの酸化数による色の変化に興味を持つ。	酸化還元の化学反応式を半反応式から作れる。	酸化還元反応の進行を、色の変化など実験を通して視覚的に判断できる。	酸化還元反応の量的関係を数値計算により求めることができる。	机間指導(ノート) 復習ﾌﾟﾘﾝﾄ 観察(実験時)
第９～１０時	金属の酸化還元反応	金属樹が生成することに興味を持つ。	金属単体の反応性をイオン化傾向で考えることができる。	金属がイオンになる場合のなりやすさを実験から判断できる。	塩酸、希硫酸と反応する金属と酸化力のある酸とのみ反応する金属の違いを理解している。	発言・発表 机間指導(ノート)
第１１～１８時	酸化還元反応の利用	身近にある電池の構造や反応の仕組みに興味を示す。	金属の製錬は、酸化還元反応を利用したものであることに気付く。	簡単な電池をつくることができる。	金属の製錬の方法について理解している。	机間指導(ノート) 復習ﾌﾟﾘﾝﾄ

5　本時の計画

(1)　本時のねらい

酸化還元反応が電子の授受であることを理解し、簡単な半反応式を完成させ、半反応式から化学反応式を導くことができる。

(2)　展　開

	学　習　活　動	指　導　上　の　留　意　点	評　価
導入 7 分	電子を用いた酸化還元の定義を復習する。	・ワークシートを記入させ、隣の席の生徒との答え合わせをさせる。 ・理解できていない生徒に、理解している生徒が説明するように指導する。	
展開 35 分		学習課題：酸化還元反応を化学反応式で表してみよう。	
	演示実験を観察する。	・半透膜を取り付けた管に $KMnO_4$、H_2O_2、KI の水溶液を入れ、それに炭素棒を浸したものを用意する。炭素棒電極にわにロクリップを取り付け電流計に接続する。 ・密にならないように、電流計の文字盤を電子黒板に拡大し、電流の向きを確認させる。 ・半透膜の説明はワークシートに記載し軽く触れる。 ・演示実験を拡大する際には、溶液の名称が確認できるような PC の位置を確認する。 ・電流と電子の流れの向きが逆であることに注意させる。	
	ヨウ化物イオンが還元剤として働くときの半反応式を完成させる。	・短時間、独りで考える時間を与える。学力差が大きく、半反応式を完成できない生徒もいるので、隣り、前後の席の生徒との相談をさせる。	
	過マンガン酸イオンが酸化剤として働くときの半反応式を完成させる。	・電子は、ヨウ化カリウム水溶液から出ていたか、入っていったかを確認させる。 ・半反応式を黒板に書かせる。	電子の移動を意識して、電子を含むイオン反応式(半反応式)を完成できる。 C　机間指導
	還元剤、酸化剤の半反応式から、イオン反応式を導く。	・電子は、過マンガン酸カリウム水溶液から出ていたか、入っていったかを確認させる。 ・半反応式を黒板に書かせる。	
		発問：２本の半反応式を１本のイオン反応式にまとめるにはどうしますか。	
		・還元剤が出した電子を酸化剤が受け取っており、電子が外にはみ出してくることはないことを確認させる。 ・半反応式を何倍かして電子の係数を揃えて足し算することでイオン反応式になることを確認させる。 ・イオン反応式を黒板に書かせる。	酸化剤、還元剤の半反応式から電子を消去して１本のイオン反応式を作ることができる。 B 机間指導・発表
整理 8 分	学習内容を踏まえて、二クロム酸イオンと過酸化水素の反応のイオン反応式を完成させる。	・最初は独りで取り組ませ、隣り、前後の席の生徒と相談し、完成を目指す。 ・イオン反応式を黒板に書かせる。 ・本時の振り返り。 ・過酸化水素水とヨウ化カリウム水溶液、過酸化水素水と過マンガン酸カリウム水溶液の電流の向きから次時の学習課題を予め提示する。	

(3)　目指す生徒の姿：　酸化還元が電子の授受であることを理解し、半反応式、イオン反応式で変化を表せるようにする。電池、電気分解の学習など、今後の酸化還元反応の学習で必要となる技能、考え方であるので、しっかりとした定着を図りたい。

令和３年度　研究協議会　記録

教　科（　理　科　）

研究授業実施日：令和３年１０月１８日(月)　６校時
科目・単元名　：化学基礎・第２編　物質の変化　第３章　酸化還元反応

Ⅰ．授業者の感想

時間配分に難儀し、本時の目標の半分も達成できなかった。生徒の既習事項の定着度を見誤ってしまい、酸化還元反応の定義の確認に多くの時間を使ってしまった。また電子黒板の操作にも手間取ってしまった。この経験を次回以降の指導に生かしていきたいと思う。

Ⅱ．参観者の感想

目標の提示の仕方が丁寧で、生徒もきちんとノートに記し、見通しをもって授業に臨んでいる様子だった。ワークシートも段階を踏んだ課題構成になっており、生徒は何をやるべきなのかがわかりやすかったと思う。机間指導が丁寧で、声かけがしっかりされていた。生徒同士で自然に教え合ったり、確認し合う様子も見られた。書画カメラ等のＩＣＴ機器の活用へのチャレンジ精神が素晴らしいと感じた。視覚的にも理解しやすいように工夫されていたと思う。

Ⅲ．授業改善に向けた提案

時間短縮のために授業前に準備できたことはないのであろうか。電源を入れておく、機器の設定など積み重ねれば大きな時間短縮につながる可能性があった。また内容が盛り沢山すぎたかもしれない。むしろ今回の授業の進度が生徒の実態に合っていたような気もする。知識の定着について言及があったが、週に１コマの授業ではなかなか確認するのは難しい。前回の授業から時間があるので、それなりに力のある生徒でも忘れがちになる。今回のような丁寧な机間指導はかなり効果的であったと思う。

英語科（コミュニケーション英語Ⅱ）学習指導案

日　　時 ： 令和３年１０月１８日（月）６校時
対 象 生 徒 ： 総合学科　２年３組
場　　所 ： ２年３組教室
指　導　者 ： 英語科
使用教科書 ： Revised BIG DIPPER English Communication II

１　単元名 Lesson 5　Diversity Brings New Products

２　単元の目標　製品開発に多様な人間が直接関わることの重要性について学び、日常的な実例から多様性の意義を考える。

３　単元と生徒

（１）生徒観　総合学科生活福祉系列の生徒２４名（男子２名、女子２２名）で、おとなしく授業中の発言の声は非常に小さい。それがコロナ禍で大きな声を出さないようにしている、ためさらに静かである。ペアでの音読練習では声を出すが、それも最近は行えていない。学力は、非常に高い生徒から、基本が身についていない生徒まで大きな差があるが、授業に臨む姿勢は、前向きである。英語に対する自信のなさのためにおとなしくしているものと思われる。自信をつけさせ、英語を使えるという実感を持たせたいと考えて指導している。

（２）教材観　コミⅠの教科書の Lesson　5 が「Universal　Design」で、身の回りの製品が、障がいを持つ人の観点から考えると、誰にでも使いやすいものでないことを学んだ。それを踏まえて、身の回りのもので、こうすればもっと良くなる、という提言を、本文で学んだ表現や文法事項も活用して、英語で行わせたい。身近なものに目を向けてそれを英語で発信するのに向いた教材である。

（３）指導観　自分で思いついた考えを英語で伝えようとする姿勢を尊重し、英語で伝えることができたときの喜びを経験させたいところである。コロナ感染予防に配慮しながらも、感染状況が収まっていたら、グループ内での応報交換を増やしたいと考えている。

４－１　単元の指導計画

１時間目　単元の導入及び Part 1 の内容の理解
２時間目　Part 1 の内容の理解と、本文の内容の Retelling
３時間目　Part 2 の内容の理解
４時間目　Part 2 の Retelling、及び、商品開発のプレゼンの実践（本時）
５時間目　Part 3 の内容の理解
６時間目　Part 3 の Retelling、及び、障がいのある人向けの商品開発のプレゼンの実践
７時間目　Part 4 の内容の理解
８時間目　Part 4 の Retelling、及び、製品開発における多様性の重要性を理解する
９時間目　Lesson 5 全体のまとめ
１０時間目　Part 2、Part 3 での商品開発のプレゼンで発表したり、聞いたりしたことをもとに、「こんな商品があったらいいのに」というタイトルで英作文を行う

４－２　評価計画

A 関心・意欲・態度　身近にある製品に施された工夫やその由来について、知っていること・思っていることを発言しようとする。
B 表 現 の 能 力　動名詞の意味上の主語、関係代名詞の継続用法、助動詞＋ have ＋過去分詞、完了不定詞を用いて正しい英文を書くことができる。
C 理 解 の 能 力　真に創造的で多様な製品が開発されるために必要なことについて理解できる。
D 知 識 ・ 理 解　特定の「アイデア商品」について、その開発者や開発の経緯を理解している。

５　本時の計画

（１）本時のねらい

現存する製品をどのように改良したらよくなるかを英語で表現し、発表できる。

（２）展開

	学習活動	指導上の留意点	評価
導　入 ７分	Look up and read part 2. Retell Part 2.	ペアの一方が日本語で言った内容をもう一方が英語で言うことにより、Part　2 の内容をお互いが頭に入れるような効果を狙う。 　その後 Retelling を行い、内容について英語で表現させる。	
展　開 １０分	本時の目標 現存する製品をどのように改良したら良くなるかを英語で表現し、発表できる 発問 仮に制服を個人個人によって違うものにするとしたらどのようにしますか。 どういう生徒にはどういう制服が良いかを英語で発表しよう。		
	・ブレインストーミングして、様々な形式の服装を考える。 ・タブレットを使用して、英語での言い方を調べる。 ・それぞれのメリットと対象とする生徒像について考える ・各自が文章にまとめる。	ブレインストーミングにより、できるだけ多くの言葉を考えさせ、タブレットで調べさせる。 　服装に関する語彙を増やさせながら、その語彙を知らない生徒にどのように説明するかを英英辞典を使用して指導者が助言する。 　グループ活動ができない場合は、何人かの生徒に、黒板に考えを板書させる。それを参考にしながら、自分の文章を完成させていく。	できるだけたくさんの情報を書くことができる。
＜２＞ １２分 ８分	・グループ内でのプレゼンテーション ・グループ代表のクラス全体へのプレゼンテーション	４人くらいでグループを作らせ、対面しないように工夫しながら、１人ずつ他の生徒に対し発表させる。 　発表を聞いた生徒は、それに対して質問や意見を述べる。 　全員終わったら、グループごとにもっとも優秀な生徒を決めさせ、教卓から発表させる。	文章を理解し、自分の意見や質問を相手に分かるように言うことができる。
まとめ ３分	印象に残った内容について指導者がコメントする。	コメントを英語で理解させる。	

（３）目指す生徒の姿

　英語が苦手で自信がなく、しかもマスクをしているため、普段の発言はよく聞こえない生徒たちである。自分の言いたいことを英語で表現できるという自信と喜びを実感させ、英語の学習に前向きに取り組む生徒にしたい。

令和３年度　研究協議会　記録

教　科（　英　語　）

研究授業実施日：令和３年１０月１８日(月)　６校時
科目・単元名　：コミュニケーション英語Ⅱ・Lesson 5　Diversity Brings New Products

Ⅰ．授業者の感想

おとなしいクラスだがペアやグループだといつもよりは英語を話そうという姿勢が見られた。検索に慣れていない生徒がいて最初に時間がかかってしまった。レッスン 5 は難しく、制服をテーマにすれば様々な発想が出るのではないかと期待した。最後には生徒がよく頑張ってくれたがタスクの与え方は慎重にならなければと思う。

Ⅱ．参観者の感想

ブレーンストーミングの方法が難しいと思ったが、グループになり練り合う場面があってよかった。最後には英語で発表できていて、内容的にも上手く出来ていた。
検索には言葉の入力にコツが要る。グーグル翻訳は自動で英語にしてくれるので、利用を進めるか制限するか難しい。正しい使い方を教える必要がある。
指導案の目標が抽象的だったのではないか。

Ⅲ．授業改善に向けた提案

目標を絞った方がやりやすい。目標達成のポイントに「SMART」（Specific：「具体的、分かりやすい」Measurable：「計測可能」Achievable：「達成可能な」 Relevant：「関連性」 Time-bound：「期限が明確」）がある。
パート 2 と関連づけるなら「女子生徒の視線で」制服をよくするとしたらという質問でもよい。
生徒の反応がない理由は「質問が大きすぎる」、「時間が足りない」、「自信が無い」、「指示が多すぎる」などがある。
質問は Yes No、A or B など簡単なものからするとよい。
ICT 活用例では Google フォームをつかってすぐ授業の振り返りを行ったり、投票を行ったり、音声ファイルを提出させたりする例がある。グーグル翻訳の使い方は、意見の後にしっかり説得力ある理由をつける、などの流れを評価するのがよいのではないか。

授業研修

国語科（国語総合／漢文）　学習指導案

日　　時 ： 令和３年９月３日　３校時
対 象 生 徒 ： １年４組２７名
場　　所 ： １年４組教室
指　導　者 ： 照井　佳那子
使用教科書 ：『改訂版　標準国語総合』（第一学習社）

１　単　元　名　　漢詩から文章の技を学ぼう～「転」の働きに注目して～

２　単元の目標

【知識及び技能】
・語句の意味，用法及び表記の仕方などを理解し，文章の内容を把握することができる。
【思考力・表現力・判断力等】A⑴イ
・自分の思いや体験が効果的に伝わるよう、文章の種類や構成を確かめ、表現の仕方を工夫することができる。
【学びに向かう力・人間性等】
・言葉がもつ価値への認識を高めるとともに、我が国の言語文化の担い手として自覚を持ち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。

３　単元と生徒

⑴　生徒観

生徒数は２７名である。１学期末に訓読のきまり書き下し文の学習を開始し、現在はそれらの知識・技能の習得を使って、漢文の学習に取り組んでいる。

国語の課題として、文章作成に時間がかかること、そして自分の体験や思いを伝えるための表現の方法が乏しいことがあり、本単元の学習を将来に繋がるような作文のスキル向上に関連させたいと考えている。

前単元の「絶句」では、唐詩の時代背景や、「起」「承」「転」「結」構成など、漢詩の基本的な構成や知識を学習済みであり、本単元ではそれらを活用して、漢文の学習を社会や自分との関わりの中で生かせるような展開を理想としている。

⑵　教材観

本単元では盛唐の詩人、杜甫の五言律詩「春望」を学習する。

本作の、首聯、頷聯にかけては、対句や押韻などの表現技法が駆使され、戦乱で荒廃した都や街と新たな春を迎えた自然、その不変と人間の営みの無常さの対比が視覚的に印象に残る。

続く頸聯では、春の景色から一転し、家族からの手紙、幽閉された自らの境遇へと視点が移る。尾聯では何もできずに時間が過ぎ、仕官も叶わぬまま老いてゆく作者の無力感や絶望が印象的である。

「春望」では起承転結の構成に注目すると、雄大な自然と人為の対比から、作者個人へクローズアップされていく視点の移動に気づくことができる。特に頸聯では、遠景・中景の描写から、急に近景へ視点が移ることで、人間と自然、その中の作者個人を立体的に描くという文章の「転」の工夫を読み取りたい。

⑶　指導観

本単元では、漢詩の起承転結構成に注目し、詩の内容を考察する。そして、「転」の効果を実際の作文に生かすことを目標としている。

漢文は起承転結構成の源流であり、短い文章で効果的に文章構成の効果を実感できる。漢文の学習で起承転結の構成や効果に注目し、それを日常の文章に生かすことで、文章表現の方法を増やすと共に、見通しを持った因果的思考や、脈絡のある文章表現を高める「書くこと」のスキル向上に繋げられるのではないかと考える。

また、漢文は文字数が限られているという特徴がある。「転」には作者の創意工夫が凝縮しており、構成に着目することで漢詩特有の作品の面白さを実感できるのではないかと考えている。

４　単元の指導計画と評価計画（全６時間，本時４／６）

時	評価規準			学習内活動
	知識及び技能	思考・表現・判断	主体的に取り組む態度	
1			杜甫や「春望」について関心を持とうとしている。	杜甫の生涯や本文の訓読、書き下し文について確認する。
2	語句の意味，用法及び表記の仕方などを理解することができる。			唐の時代背景と共に本文の訳を確認し、概要を把握する。
3		起承転結の効果に注目し、「春望」の内容を読み取ることができる。		起承転結の効果を確認し、句の内容を詳しく読み取る。
4		「転」の働きを使って日常の文章を作成することができる。		普段の文章構成に「転」の働きを加え、２つのテーマについて文章を作成する。
5		自分の思いや体験が効果的に伝わるよう、「転」の表現を活用して作文を書くことができる。		「転」の表現を活用して２つのテーマについて４００字以上の作文を書く。

５　本時の計画（３／５時間）

⑴本時のねらい：起承転結の効果に注目し、「春望」の内容を読み取ることができる。

段階	学習活動	指導上の留意点	評価
導入	・前時の学習内容を確認する。 ・本時の目標を確認する。	・前時の学習内容を提示し、本文の概要を再確認する。 ・本時の目標を提示し、見通しを示す。	
	本時の目標：「起承転結」に注目し、「春望」を深読みしよう。		
	発問：「起承転結」の働きを踏まえると、何が読み取れるだろう？		
展開	・「春望」では「転」にどのような働きや効果があるのか考察する。 ・グループで考察した内容をGoogle ドキュメントにまとめ、意見を発表する。	・「絶句」で学習した起承転結の構成を再確認し、「春望」の内容を考察する。 ・「転」による視点の変化に着目できるよう、「読み取りヒント」を提示し、１～８句の場所・場面についてGoogle ジャムボードを使って整理する。	・起承転結の効果に注目し、「春望」の内容を読み取ることができる。
まとめ	・「春望」の起承転結の詳細と内容についてまとめる。	・起承転結の働きに注目した「春望」の内容について生徒の意見を集約する。 ・「転」から急接近する視点の変化を提示する。	

漢詩から文章の技を学ぼう！ワークシート②

組　　番　名前

	聯（起）		聯（承）		聯（転）		聯（結）		言葉の意味
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	城　時　烽火　三月　家書
	国破山河在	城春草木深	感時花濺涙	恨別鳥驚心	烽火連三月	家書抵万金	白頭搔更短	渾欲不勝簪	
作者									抵　更　白頭　渾　欲不勝
形式	国の都は破壊されているが、山と河は変わらぬ姿で存在している。	（　　）には春がおとずれ、草や木が深々と生い茂っている。	（　　）に心を痛め、花を見ても涙を流し、	親しい人たちとの別れを悲しみ、鳥のさえずりを聞いても胸を痛める。	危険を告げる（　　）は（　　）絶え間なくあがり続けている。	（　　）は一万金にも相当する。	（　　）を搔きむしるほどに髪の毛が（　　）	（　　）冠を留める簪をさせそうにもないほどだ	

「春望」　の深読み！
～「起承転結」の働きを踏まえると、何が読み取れる？～

	起	承	転	結
働き	・場面の設定 ・物事の始まり ・世界観の設定	・起の続き ・補足 ・似ている世界観	・場面の転換 ・視点の切り替え ・新たな世界観 ・急展開	・起承転のまとめ ・しめくくり ・オチ
内容				
絶句では・・・	美しい春の自然風景 （白い鳥と緑の川） 白・緑の対比	美しい春の自然風景の続き（緑の山々と鮮やかな花） 緑・赤の対比	春の自然風景から作者の心情や姿に切り替わる	故郷に帰りたくとも帰れない作者の姿や悲しみ

読み取りヒント①	対比がある？ （何と何を対比している？）
読み取りヒント②	①～⑧それぞれの場所や位置関係に注目すると・・？ （Googleジャムボードを見てみよう！）
読み取りヒント③	杜甫の生い立ちから・・ 彼が目指していたものや「春望」を作った時の状況とは？

保健体育科（保健）学習指導案

日　　時 ： 令和３年７月１６日（金）４校時
対象生徒 ： ２年２組
場　　所 ： ２年２組教室
指 導 者 ： 小原　拓磨
使用教科書 ： 大修館書店

１．単元名　　高齢者のための社会的取り組み
　　　　（生涯を通じる健康　ア 生涯の各段階における健康）

２．本時の評価規準

①関心･意欲･態度	すべての人が暮らしやすい社会づくりについて調べている。
②思考･判断	保健・医療・福祉の連携や総合的な施策を分析している。
③知識･理解	高齢者の健康課題について説明できる。

３．本時の目標　高齢者の健康課題を説明できる。
　　　　　　　誰もが健康で安心できる社会的な取り組みを説明できる。

４．本時の活動

	学習内容及び活動	教師の支援・留意点	評価の観点・方法
導入 ５分	・前時の復習をする。 ・本時の目標を確認する。	・前回学習した内容を確認する。 ・本時の目標を提示する。	
展開 ４０ 分	高齢者の健康課題 ・「高齢者」について確認する。 ・高齢期の健康課題について理解する。	・６５歳以上が高齢者となり、７５歳以上は後期高齢者であることを確認する。 【発問】高齢者の割合は人口の何割でしょうか。 課題①介護や支援を必要とする高齢者 ・老々介護、孤独死といったケースを説明する。 課題②健康寿命をのばす ・健康寿命という用語を確認する。 課題③公的な支援体制 ・生活の質を高める支援体制について説明する。	③ノート
	誰もが健康で安心できる社会的な取り組み	【発問】グループ内で各用語を選び、その用語について説明しよう。 用語「ノーマライゼーション」 「バリアフリー」 「ユニバーサルデザイン」 ・グループ内での役割を決めるよう指示する。	
	・グループ内で発表し合う。	・事前に調べた各自のシートを使って、グループ内で発表させる。	①シート 行動観察
	・グループ内の意見をまとめる。	・発表後にグループ内で意見集約し、発表原稿をまとめる。（司会係、入力係）	
	・グループ毎のまとめを発表し合う。	・各グループでまとめた内容を発表する。（発表係）	
整理 ５分	・学習内容をまとめる。	・ノーマライゼーションの理念を中心にバリアフリー、ユニバーサルデザインといった社会的な取り組みが行われていることを確認する。	

保健体育科（体育）学習指導案

日　　時 ： 令和３年７月８日（木）４校時
対象生徒 ： １年３組（27名）
場　　所 ： 第１体育館
指 導 者 ： 永須　裕貴
使用教科書 ： 『ステップアップスポーツ』
（大修館書店）

１　単　元　名　　球技「ネット型」バレーボール

２　目　　標　　勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、作戦や状況に応じた技能や仲間と連携した動きを高めてゲームが展開できるようにする。（運動の技能）

球技に主体的に取り組むとともに、フェアなプレイを大切にしようとすること、役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとすること、合意形成に貢献しようとすることなどや、健康・安全を確保することができるようにする。（態度）

技術などの名称や行い方、体力の高め方、課題解決の方法、競技会の仕方などを工夫し、チームや自己の課題に応じた運動を継続するための取り組み方を工夫できるようにする。（知識、思考・判断）

３　生徒と単元

生　徒　観　　生徒数２７名（男子１５名、女子１２名）で、クラスの雰囲気は全体的に素直で明るい。事前に聞き取りしたところ、「バレーボールが好き」と答えた生徒が半数を超えたのに対して、「得意」と答えた生徒は３名にとどまり、楽しいと感じているものの、技術的に自信が持てない生徒が多かった。授業では、お互いに声かけして活動する姿が見られる。

教　材　観　　仲間とボールをつないで返球できるようになれば、ラリーの応酬に楽しさを見いだすことができる運動である。技能が向上することにより、相手のとれない場所や変化をつけて打つことに喜びを感じることができ、更に、強いサーブやスパイクを打ってみたいなどの意欲がわいてくる運動である。

指　導　観　　ラリーの応酬に楽しさを見いだすために、その基礎となるオーバー・アンダーハンドパスの基本を定着させたい。ある程度ボールコントロールが思い通りにできるようにし、ボールをつなぐことの楽しさや喜びを感じられるように指導する。

４　単元の評価規準

関心・意欲・態度（ア）	思考・判断・表現力（イ）	運動の技能（ウ）	知識・理解（エ）
・球技の楽しさや喜びを深く味わうことができるように、フェアなプレイを大切にしようとしている。 ・役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとし、合意形成に貢献しようとしている。 ・健康・安全を確保して学習に主体的に取り組もうとしている。	・生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現を目指して、自己や仲間の課題に応じた球技を継続するための取り組み方を工夫している。	・球技の特性に応じて、ゲームを展開するための作戦や状況に応じて仲間と連携する動きや技能を身につけたり、高めたりしている。	・技能などの名称や行い方、体力の高め方、課題解決の方法、競技会の仕方などを理解している。

（各項目の評価　Ａ：良くできている　Ｂ：できている　Ｃ：努力を要する）

５．本時の計画（１５／１８時間）

（１）本時の目標

ゲームの中で三段攻撃を仕掛けるための技能を高める。

（２）展　開

段階	学習活動	指導上の留意点（教師の支援）	評価（方法）
導入 ７分	○集合・挨拶・出席確認 ○体操・補強運動 ○本時の目標を確認する	○欠席や見学を確認し、見学者に指示を与えて、プリントに記入させる ○正確に補強運動を行わせる ○本時の目標を示し、生徒全員確認させる	
	目標：ゲームの中で三段攻撃を仕掛ける場面をつくることができる。		
展開 ３５ 分	**発問：スパイクにつなぐ過程で大切なことは何だろうか？**		
	○グループ毎の練習 ・円陣パス ・サーブレシーブ ・スパイク ○ゲーム	○お互いに声をかけ合い、連携を深めてボールを繋げるようにする ○上手くできない生徒には易しめのボールを出すようにする ○レシーブ・トスの過程を重視し、スパイクまで繋げるようにする ○ゲームにおけるローテーションを確認しながら進行するようにする	○つなぎから三段攻撃を仕掛ける場面をつくることができたか（観察：ウ）
まとめ ８分	○本時の振り返りを行う ○後片付け・挨拶	○数名の生徒に感想を聞き、三段攻撃を仕掛けるための大事なポイントを全体で共有する ○全員で協力して後片付けをさせる	

〈ウ：運動の技能〉

（３）目指す生徒の姿

運動が得意な生徒と運動が苦手に感じている生徒が、お互いに関わり合いを大切にし、協力して一つのことに取り組むことのできる集団・人間性を育むことを目指す。

家庭科（家庭総合）学習指導案

実　施　日：１０月２５日（月）３校時
対 象 生 徒：１年生活福祉系列１２名
指　導　者：福田　菜摘
使 用 教 室：家庭経営室
使用教科書：家庭総合（東京書籍）

１　単元名

これからの衣生活　持続可能な衣生活を目指して
〔　学習指導要領　内容Ｂ　衣食住の生活の科学と文化　〕

２　単元目標

衣生活がどのように資源、環境問題と関わるのかを知り、持続可能な衣生活に寄与するための方策を考える。

３　単元と生徒

（１）生徒観

授業に意欲的に取り組む姿勢が見られるが、全体的に大人しい生徒が多く、考えたことをまとめたり、話したりすることを苦手としている生徒もいる。簡潔な発問を心掛けると共に、生徒が自分の生活と結びつけながら思考できるよう授業内容を工夫したい。

（２）教材観

ファストファッションが流行する一方で、被服の原料である繊維の生産者や被服をつくる労働者が過酷な労働を強いられている現状が明らかになってきている。フェアトレードやエシカルファッションなど、環境や生産者・労働者に配慮した商品が販売されるようになってきている中で、私たちには消費者として自分が着ているものに関心を持つことが求められている。被服を選ぶ際は、流行や安さだけを求めるのではなく、環境や生産者に配慮したものであるかという視点も意識させたい。

（３）指導観

持続可能な衣生活の実現のためには、一人一人が意識して行動することが欠かせない。多様な選択肢がある中で、自らの消費行動が世界にどのような影響を及ぼすのかを想像し、意思決定していく力の育成が必要である。今回は、被服の廃棄や生産に注目させ、エシカルファッションを意識するきっかけとしたい。

４　単元の指導計画と評価計画

（１）指導計画

資源としての衣服…１時間
衣生活と環境…２時間（本時１／２）

時	学習内容	評価規準			
		関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
１ 本 時	ファストファッションの「安さ」がもたらすものは何だろう？				消費行動が環境や社会に及ぼす影響を理解することができる。
２	エシカルファッションを実践しよう	エシカルファッションを自らの生活に取り入れようとしている。	エシカルファッションについて、自分にできることを具体的に考えることができる。		

5　本時の計画

（1）本時のねらい

消費行動が環境や社会に及ぼす影響を理解することができる。（知識・理解）

（2）学習過程

	学習活動	指導上の留意点	評価
導入8分	1　２種類のＴシャツの価格の違いは何か予想し、どちらを選ぶか決定する。	・価格の違いに注目させるために２種類のＴシャツを提示する。	
展開32分	2　本時の目標と学習課題を確認する。	・ファストファッションは消費者にとってメリットが多いが、デメリットに注目することも大切であることを伝える。	
	本時の目標：消費行動が環境や社会に及ぼす影響について理解することができる。		
	学習課題：ファストファッションの「安さ」がもたらすものは何だろう？		
	3　ファストファッションのメリットを考える。	・生徒から出た意見を整理しやすいようにジャムボードを活用する。	
	4　ファストファッションのデメリットを考える。	・消費行動と環境や社会のつながりを意識できるように２つの視点を与える。	
	（1）廃棄される被服の多さ 処分される被服の約６８％が可燃ゴミ・不燃ゴミとして廃棄されている。 （2）生産者の労働環境 綿の生産が盛んなインドでは、栽培の際に使用する大量の農薬により、体調不良者がでている。他にも、児童労働や低賃金労働などの課題がある。		
	5　エシカルファッションについて理解する。	・エシカルファッションとは、自然環境や労働環境に配慮してつくられた被服をさすことを伝える。 ・エシカルファッションのブランドの製品を購入することだけが正しいのではなく、被服の処分の仕方を変えることも大切であることを確認させる。	
整理10分	6　本時の振り返りをする。 7　共有する。	・本時の学習を踏まえ、どのような消費行動が必要と考えたかを理由を含めて記入させる。	消費行動が環境や社会に及ぼす影響を理解することができる。 （振り返りシート、発表）

（3）目指す生徒の姿

生活を主体的に営むために必要な、消費者として物事を多角的に捉え、選択する力を身に付けさせたい。

家庭科（家庭総合）学習指導案

日　　時 ： 令和３年７月６日（火）５・６校時
対 象 生 徒 ： ２年１組２５名
場　　所 ： ２年１組教室
指　導　者 ： 齊藤　浩幸
使用教科書 ： 家庭総合　自立・共生・創造（東京書籍）

1　題材名　　持続可能な生活について考える

2　題材の目標

(1) 食・消費生活と社会・環境とのかかわりに関心をもち、持続可能な生活を目指す自立した消費者として行動しようとしている（関心・意欲・態度）
(2) 現代の食・消費生活についての課題を見いだし、その解決を図って持続可能な生活に向けた具体的な方策について考え、まとめたり、発表したりしている（思考・判断・表現）
(3) 持続可能な生活に向けた食・消費生活に関する情報を収集・整理することができる（技能）
(4) 持続可能な社会のあり方や、現代の食・消費生活に起因する課題について理解している（知識・理解）

3　題材と生徒

(1) 題材観

この題材では、持続可能な社会の持つ広範な意味と、消費という行為の大きな影響力について、生徒に消費をする主体者（消費者）として考えさせ、学ばせたい。中学校段階では、持続可能な社会に向けた生活について触れられてはいるが、「持続可能な社会＝環境に配慮しながら発展する社会」というとらえ方にとどまっていると同時に、消費者としての意思決定やライフスタイルの選択についてまでは深くは学習していない。そこで本題材では、広範な持続可能な社会のあり方を理解させ、それに向けた消費者としての可能性と生活者としてのライフプランについて具体的に考えさせる。

(2) 生徒観

授業には意欲的に真面目に取り組む生徒が多く、自分の意見を積極的に述べることができる生徒もなかには見受けられる。適切な課題設定と発問をし、生徒の思考と理解を深めるよう工夫したい。

(3) 指導観

生徒にとって消費は生活していくための当たり前の行為になっていることだが、自分が社会と大きな影響を与えうる消費者だという自覚や、自身の食・消費生活と生産者とのつながりに対する意識は乏しい。本単元を通して、自分が選択する食・消費生活が社会に与える正と負の影響をさまざまな角度から思考、判断、表現する場を設け、消費生活を多面的に捉えることができるように指導していきたい。そして、生涯を通して持続可能な社会に向けた適切な意思決定ができる自立した消費者としての主体性を育てていきたい。

4　題材の指導と評価の計画

時	学習内容	評価規準			
		関心・意欲・態度（ア）	思考・判断・表現（イ）	技能（ウ）	知識・理解（エ）
1	食料自給率から考える（２）		①持続可能な社会に向けた食生活のあり方について、課題解決に向けて考え、工夫している		①日本の食料自給率の現状がはらむ問題を多角的にとらえ、理解している
2	生産者から考える（本時１・２／２）	①持続可能な社会に向けて消費者として、具体的に行動しようとしている			②持続可能な社会について的確に捉えながら消費の意味を理解している
3	消費の可能性を考える（３）	②持続可能な生活を目指す自立した消費者として行動しようとしている	②持続可能な生活に向けた具体的なライフプランについて考え、表現している	①持続可能な生活に向けた食・消費生活に関する情報を収集・整理することができる	

5　本時の計画

(1) ねらい

消費の意味を理解し、消費者として持続可能な社会に向けた消費行動について具体的に考えることができる。

(2) 展開

	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入10分	1. 持続可能な社会の必要性について確認する。 ・本時の学習内容と目標を確認する。	・これまでの学習をふり返らせながら、持続可能な社会の構築が必要になった背景を確認する。 **目標：持続可能な社会に向けて、私たち消費者にできることを考えよう。**	
展開80分	2. 持続可能な社会構築のための企業の取り組みを理解する。 ・フェアトレードに関する動画を視聴する。 ・消費における生産者の立場を理解する。 3. 持続可能な社会構築のための消費者の具体的な消費行動を考える。 4. 消費の意味を理解する。 ・消費の意味を考え、発表する。	・生産者の立場を理解させるために、フェアトレードチョコレートを含めた3種類のチョコレートを提示する。 **(1)一般的なチョコレート(50ｇ¥98)** **(2)アグロフォレストリーチョコレート(45ｇ¥170)** **[アグロフォレストリー農法カカオ%以上]** **(3)フェアトレードチョコレート(100ｇ¥298)** **[フェアトレードカカオ%]** ・フェアトレードに関する動画を視聴させ、フェアトレードが生まれた背景、フェアトレードの目的について理解させる。 ・持続可能な社会構築に向けた高校生にでもできる身近な消費行動を考えさせる。 **発問：“消費”という行動には、どんな影響力があるか** **生徒の解答** **正：地球環境を守ることができる、生産者を支援できる、世界の子どもを救う、よい社会をつくることができる** **負：環境破壊を進める、生産者の生活を苦しめる人権の侵害となる、不幸な子どもを増やす** ・グループ内、全体で意見を出し合い、自分の消費が環境や社会に与える影響について考えを深めさせる。	【エー②】持続可能社会について的確に捉えながら消費の意味を理解している。(ワークシート・発表)
まとめ10分	5. 本時をふり返り、これからの自分の消費について考えをまとめ、発表する。	・商品の背景を考えることの重要性について助言する。 ・グリーンコンシューマー、エシカルコンシューマーについて確認する。	【アー①】持続可能な社会に向けて消費者として、具体的に行動しようとしている（ワークシート）

評価の観点：【ア】関心・意欲・態度　【イ】思考・判断・表現　【ウ】技能　【エ】知識・理解
（　）は評価方法

研修報告

初任者研修を振り返って

家庭科　福田　菜摘

１　はじめに

１年間の初任者研修を通して、教育公務員としてあるべき姿やこれからの教員生活について指導していただいた。今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から中止になった研修もあったものの、オンラインでの研修の開催など、多様な学びの場を設定していただいた。また、生徒には１人１台タブレットが支給され、授業のスタイルが大きく変化し、試行錯誤を重ねた１年であった。以下、初任者研修を通して自分自身が得た成果についてまとめる。

２　校内研修

(1)一般研修

一般研修では、本校の教育目標や様々な校務分掌、学校・学級運営などについて理解を深めることができた。坂本校長先生、亀沢教頭先生、髙橋事務長、指導教官である高橋先生をはじめ、各先生方にご指導を賜ることができた。様々な研修を通して、教育公務員としての自覚を持ち、自身の役割と責任を果たしていくことや組織として対応していくことなど、教育公務員のあるべき姿を示していただいた。研修を終え、以前よりも学校という組織を多角的な視点から見ることができるようになったと感じている。

(2)教科研修

教科研修では、指導教員による師範授業や講義、他教科の授業参観などを通して、様々な気づきを得ることができ、自らの授業改善につなげることができた。研究授業では、総合学科生活福祉系列の１年生と２年生、農業科学科１年生と様々な生徒を対象に研究授業を行った。生徒の実態を把握し、１時間の授業で何を身に付けさせたいのか、そのためにどのような内容にするのかを見極めていくことの大切さと難しさを強く感じた。

また、教室に電子黒板が配置され、生徒には１人１台タブレットが支給されたことにより、ＩＣＴを活用した授業デザインが進んだ。家庭科の授業においては、様々な機能を活用して授業を行うことができ、授業の幅が大きく広がった。試行錯誤を重ねていくなかで、ＩＣＴを活用する際は活用目的を明確にすることが重要であると感じた。

３　校外研修

PA 研修や明徳館高校での授業研修は中止となったが、他の研修はオンライン開催やレポート提出に切り替えるなどの対応をしていただき、研修を受けることできた。

総合教育センター主催の研修では、生徒との関わり方や授業づくりの基本、来年度からの新学習指導要領についてなど、今後の教員生活に必要なことを教えていただいた。研修の中で、ICT を活用するメリットを知り、積極的に授業にタブレットを取り入れていこうという意識を持つことができた。活動が制限されたなかではあったが、センターの先生方や他の初任者から多くのことを学ばせていただいた。

高校教育課主催の研修では、特別支援学校訪問が印象に残っている。それぞれ実態が異なる生徒に対し、自分のペースで学習を進められる環境や実態に合わせた学習課題が設定されており、特別支援学校の先生方の授業づくりの姿勢から学ぶことが多くあった。他にも、進路指導の方法や地域・企業と連携した学校行事など、卒業後の生徒の姿を見据えた指導が組織全体で行われていた。特別な配慮が必要な生徒への支援性や地域とつながる学習の重要性を感じた。

4　おわりに

多くの先生方のご指導のおかげで、様々なことを吸収できた１年となった。研修を通して、刻一刻と変化していく状況に合わせ、自らの指導力を高めていくことが必要だと実感した。今後も初心を忘れず、よりよい授業やよりよい指導のために自己研鑽に努めていきたい。

実践的指導力習得研修（2 年目）を受講して

国語科　照井　佳那子

本研修の目標

学校教育目標に基づいた教育活動への意識を高め、学習指導やホームルーム経営、生徒指導等についての実践的指導力を身に付ける。

実践的指導力習得研修講座（高等学校）Ⅰ　　令和３年５月２０日

①「保護者対応と連携」（講義・演習）

②「学校組織の一員として―学校教育目標とホームルーム経営―」（講義・演習）

③「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業構想と実践①」（講義・演習）

振り返り

①「保護者対応と連携」（講義・演習）

保護者対応についてロールプレイを行ったことで対応時の態度や表現の方法について具体的なイメージをすることができた。「適切な対応」とは何を指すのか、なかなかモデルが想定できずにいたが、今回の講義・演習を通して、主観的に判断しないことや、電話や解決にかかる時間や手間を惜しまないこと、質問を通して状況を整理することなどが当てはまるのではないかと感じた。状況を整理する冷静さと共に真摯な態度を体現することを心に留めておきたい。

②「学校組織の一員として―学校教育目標とホームルーム経営―」（講義・演習）

自己分析や生徒理解の助けにもなるＳＷＯＴ分析の方法について理解を深めることができた。現状の分析を通して、二年目の自分は学年や学校の一員として問題解決のための具体的な提案をしたり実現可能な展望を持ったりする等の力が未熟であると感じている。所属する組織で求められている役割や立場を俯瞰すると共に、自身が任されている学級経営や授業改善、分掌業務の見直しと改善を繰り返す中で養っていきたい力であると感じた。

③「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業構想と実践①」（講義・演習）

講義では授業構想について理解を深めることができた。単元のねらいや目標から逆算し、授業構想する意識は昨年よりも意識的に実施できたと感じているが、ねらいに至るまでの発問にはまだ課題が残っている。生徒の興味関心を引きつけると共に、国語の資質・能力の発揮を促すような発問でなくてはならない。演習において他校の国語科教員と議論できたことも刺激になった。現代文・古文・漢文と、教材の特質に応じて効果的な発問を試行錯誤してきたい。

実践的指導力習得研修講座（高等学校）Ⅱ

新型コロナウイルス感染対策のため所属校での自己研修

実践的指導力習得研修（３年目）を受講して

農業科学科　渡辺　大貴

１．本研修の目標

実践的指導力習得研修は、初任者研修を受講した教員に対し、「秋田県教員育成指標」及び「秋田県教職員研修体系」に基づき、実践的指導力や使命感を養うとともに、個々の教員が豊かな識見を身に付け、主体的に自らの力量を高められるよう実施する。

２．実施計画

実施月日（曜日）	研修内容	実施月日（曜日）	研修内容
4/19　（月）	部活動等の指導の在り方	6/28　（月）	生徒会運営と活性化について
5/17　（月）	教育相談の進め方	7/5　（月）	進路相談の進め方(就職)
5/24　（月）	問題行動の事例研究	7/19　（月）	問題行動の事例研究
6/7　（月）	教材の精選と活用		

３．研修を通して

これまで行ってきた研修は自分自身の経験が不足している部分の研修内容であったため、とても有意義であった。特に進路相談の進め方については、本校では離職率が高いことを知った。早い段階で進路を決め、努力して就職した生徒は大丈夫でも、自分が何をやりたいのか決められないような生徒は、一度就職しても理想と現実のミスマッチにより離職してしまうという現状も知ることができた。そのようなことがないよう、事前の情報収集や就職前企業訪問等で実際の雰囲気や実情をしっかりと確かめておくことが必要であると感じた。

問題行動の事例研究については、ＳＮＳによるトラブルも発生しているようで、自分の知らないところで誹謗中傷されているなど、情報モラルの問題も発生している。このようなネットを介してのトラブルは年を追うごとに急増しており、ＳＮＳの機能は日々進歩しているため、指導も多岐にわたっていかなければならないと感じた。匿名だからといって相手を傷つける言葉を平気で発信したり、写真をためらいもせず公開したりすることのないよう、ＳＮＳの正しい使い方も含めて携帯電話の使用方法について指導が必要であると感じた。

全体の研修を通して、まだまだ教員として不足している部分が多くあり、これからも自主的に力量を高めていけるよう努力していきたいと強く感じた。来年度、研修はないが常に学ぶ姿勢を忘れずに日々全力で生徒たちと向き合っていきたい。

実践的指導力向上研修講座を受講して

保健体育科　小原　拓磨

研修の目標（高等学校８年目）

自己理解に基づき、個々の個性・適性、分掌等に応じた資質能力の向上を図る。

概要

Ⅰ期　令和３年６月３０日（水）

・不登校の未然防止と対応（講義・演習）

「学校に登校する」という結果のみを目標とするのではなく、生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指すという支援の基本的な考え方を学んだ。未然防止、初期対応、再登校支援の各段階での対応について学んだことを実践したい。

※視点①「ほめる」ではなく「勇気づける」

※視点②「生徒の不適切な行動」＜「生徒の適切な行動」

・学校組織の一員として～自己理解に基づく目標設定～（講義・演習）

教員としての自己分析に基づく能力開発について理解するために、秋田県教職キャリア指標を用いて各領域（教科指導、学級経営など）の資質・力量の項目について確認した。演習では各領域に求められる資質・力量について考えるとともに、意見交換の場では他教員の捉え方を知ることで新たな気付きがあった。

※生徒のレジリエンス（強靭さ）を高めるためには、教員自身のレジリエンス向上が不可欠

・カリキュラム・マネジメント（講義・演習）

学習指導要領改訂の重要なポイントであるカリキュラム・マネジメントについての講義を受講した。学校の教育目標を含めた教育課程の編成、実施、評価、改善といったサイクルを確立し、推進しなければ、「学校」や「先生」の存在意義が問われる事態になりかねないと感じた。また、これからの教員の資質として、コーディネーション・スキルが重要視されると感じた。

※教科横断的な視点で教育内容を<u>組織的に</u>配列する

※生徒や地域の現状に合わせて教育課程を<u>改善し続ける</u>

※教育内容と人的・物的資源等を<u>効果的に</u>組み合わせる

Ⅱ期　令和３年８月１７日（火）

・授業評価による継続的な授業改善（協議・演習）

前半の研修は、教科の枠を越えたグループワーク（１グループ４名程度）を行った。各教員の授業の様子を動画で視聴した後、ねらいを達成するための手立てについて互いに評価し合い、改善点について協議した。また、協議後には担当指導主事から指導、助言をいただいた。

【工業（機械）、外国語（英語）、地歴・公民（公民）、保健体育】

後半の研修は、教科の担当指導主事による教科別講義を受講し、振り返りを行った。実践的指導力の「実践的」とは「適切な手立てを講ずる力」であり、ねらいを達成するために必要な学習活動や教材等を構想でき、指導の場面で実行することだと確認できた。また、授業の様子や指導案をもとに、「評価規準を生徒の姿で記す」、「学習活動、発問に明確な理由付けをする」、「生徒の思考をアクティブにする手立てを持つ」といった具体の指導、助言をいただいた。

中堅教員として、積極的に学校経営に参画することや各分掌に必要な役割の理解を深めることがマネジメントには必須であり、「率先垂範」することが若手教員の指導力向上の一助となる。

実践的指導力向上研修講座を受講して

家庭科　齊藤　浩幸

１　研修目標（高等学校８年目）

自己理解に基づき、個々の個性・適性、分掌等に応じた資質能力の向上を図る

２　自己理解－自身の課題－

1) カリキュラムマネジメントの実践

カリキュラムマネジメントは、学校組織と教育課程の両輪を全職員でマネジメントしていくことである。これからの学校運営において必要不可欠で、その重要性とあり方を全職員で共有し、これまで以上に学校運営に参画して地域の拠点となる学校を創造するという認識をもって分掌業務や授業実践にあたらなければならない。私の課題は「カリキュラムマネジメントの視点の不足」だ。今後、学校に求められるものはさらに高度化し、持続可能で、地域社会に開かれたカリキュラムが必要になる。それによって、教員に求められる役割も多様化する。私が実践すべきことは、「世界・日本・秋田県・本校で目指す人・社会のあり方」「目の前の生徒・地域の現状や社会的資源」の２点を(1)正確に読み解くリテラシー、(2)その情報や理解をアップデートし続けるメンテナンスの２つの力を高めることである。これによりブレない、ズレない、かつ柔軟なカリキュラムマネジメントが可能であると考える。その上で、同時に意識したいのはリスクマネジメントだ。個人的には学校はゼロリスク症候群であると感じることも少なくない。リスクファクターの大小を考えず一律にリスクがあるから避けるという選択の仕方だ。リスクの発生確率とその影響の大きさを捉え、かつ自分たちの組織の「許容可能なリスク」をしっかり把握することが大切だ。この作業を組織として適切に行うことができれば、リスクを最小限にしながら運用したり、挑戦できたりする。組織を動かしていくにはこの視点も必須だと考える。

2) 授業評価による継続的な授業改善

私の授業改善における課題は「学習評価の曖昧さ」だ。この課題は 1)のカリキュラムマネジメントの視点が曖昧であったのだから当然である。明確なエビデンスに基づいた評価は合理的で生徒・保護者への説明責任も果たしやすい。行政などでも EBPM の必要性が増しているなかで、学校教育もこの評価のあり方が見直された意義をしっかり心に留めたい。私が実践すべきことは、(1)カリキュラムマネジメントに基づいた実態に即した評価規準の設定、(2)目的と目標、手立てを明確に分けて Goal である目的を果たせる手立てを逆算していく授業デザインの２点である。そして、この学習評価や授業を常にメンテナンスし続ける意識をもち実践していきたい。

３　おわりに

本研修を通して、私が学校組織・秋田県・日本・世界を構築する１人であり、よき秋田県・日本・世界を構築する“人”という最大の資源を育むことができる１人であるという意識が高まった。もちろん責任の重さを実感し、実現に向けた途方もない時間と労力を考えると陰惨を極める。だが、「改革」は無理でも１日１日“改善”し続けることはできる。周りの先生方や職員のみなさん、地域や関係者の方々、応援してくださる方々に助けていただきながら、協働しながら、柔軟に変化し続けながらこの尊い教育という仕事を楽しみたい。

令和３年度中堅教諭等資質向上研修

選　択　研　修　報　告　書

所　属　校	秋田県立増田高等学校	職・氏名	教　諭　　永　須　裕　貴
研　修　先	株式会社ＴＡＫＡフィジカルステーション		
研 修 期 間	令和３年８月４日（水）・５日（木）・６日（金）		

１　研修の概要

８月　４日（水）
　８：３０～　９：３０　清掃・準備
　９：３０～１１：３０　ＤＳトレーニング
１１：３０～１２：００　後片付け
１２：００～１３：００　休憩
１３：００～１５：００　パーソナルトレーニング（２件）
１５：００～１６：３０　トレーニングマシン修理
１６：３０～１７：３０　リトルスポーツクラブ

８月　５日（木）
　８：３０～　９：３０　清掃・準備
　９：３０～１１：３０　ＤＳトレーニング
１１：３０～１２：００　後片付け
１２：００～１４：００　休憩（ミーティング）
１４：００～１６：３０　パーソナルトレーニング（２件）、治療見学
１６：３０～１７：３０　会場設営
１７：３０～１８：３０　パブリックビューイング（ボルダリング）

８月　６日（金）
　８：３０～　９：３０　清掃・準備
　９：３０～１１：３０　ＤＳトレーニング
１１：３０～１２：００　後片付け
１２：００～１３：００　休憩
１３：００～１４：００　接客対応
１４：００～１５：００　ＤＳトレーニング
１５：００～１６：１５　ボルダリング体験
１６：１５～１７：１５　リトルスポーツクラブⅠ部

２　研修の成果（今後への生かし方も含むこと）

今回、選択研修を実施させていただいたＴＡＫＡフィジカルステーションは、「はり・鍼灸・マッサージ」をメインとした地域の治療院です。また、治療と並行して、いつでも誰でも気軽に利用できる会員制トレーニングジムとしての付加価値を高めたり、近年では介護認定を受けている方々でも利用していただけるように介護施設や個人宅への訪問治療を手がけたりと、新たな取り組みにもチャレンジしているということでした。

社員スタッフの皆さんは通常①８：３０～１７：３０の勤務時間の他、②１０：００～１９：００と③１３：００～２１：３０の勤務時間をベースとして働いていました。トレーニングジムの利用時間が平日１０：００～２１：３０、土日祝１０：００～１８：００であるため、不規則な勤務時間でシフトを組んで対応しているとのことでした。

初日は、施設内の清掃作業とＤＳトレーニングの準備からお手伝いし、実際にＤＳトレーニングに取り組んでいるところに参加させていただきました。「ＤＳ」とはデイサービスのことを意味しているがデイサービスと言われることをあまり良く思わない方もいらっしゃるということで、ＤＳトレーニングと呼んでいるそうです。ＤＳトレーニングには３日間一緒に活動させていただいた中で、様々な方々が

いましたが皆さん７０歳を超えていながら健康を意識して継続的にトレーニングしているということでした。個別にトレーニングメニューが計画されていて、無理のないように配慮がなされていました。
　また、日常的な会話でコミュニケーションを図り、その一方でやる気を持たせるような声かけを適切にかけることで、意欲を引き出している工夫がなされていると感じました。
　２日目の昼休みは通常より長くスタッフ全員でミーティングをしながらの昼休みで、直接参加することはできませんでしたが、情報の共有や今後の方針や戦略など、多岐にわたって話し合いができる場が設定されていて職場でのコミュニケーションを図る工夫をしていました。夕方からは、ボルダリングのパブリックビューイングを開催する準備を進め、オリンピックのライブ配信を視聴しました。普段からボルダリングに親しんでいる常連さんが集って技術の高さを勉強する場にもなっていました。知識を持ち合わせた人同士の会話は「やっぱり違うな」と思い、非常に楽しかったです。
　３日目は、ほんの一部ではありましたが、接客対応もさせていただきました。適切な対応ができたかどうか自信はありませんが、貴重な体験をさせていただきました。また、ボルダリングを実際に体験させていただくことができ、今までの見ていたイメージよりも負荷が大きく、大変なスポーツであることが分かり、ゴールまで完登した時の達成感を味わうこともできました。３日間を通じて、パーソナルトレーニングを拝見させていただきましたが、利用者一人ひとりにトレーニングの実施方法とその効果を説明しながら、週に１～２回のペースで計画的に進められていました。その指導を受けて、ゆくゆくは自分自身で自立して継続して取り組んでいけるようになるのだと感じました。最後に、リトルスポーツクラブに初日と最終日、一緒に参加することができました。小学校１～３年生を対象に、運動することの喜びや楽しさを体感させられるような様々な取り組みがなされ、子どもたちと目線を同じ高さにして関わっているスタッフの姿を拝見し、大事なことを学ぶことができました。
　今回の研修で体験したことは、今後の教科指導や進路指導、クラス経営に生かすことが十分に出来ると感じられる内容でした。人との関わりの中でなにより大事なことは、その人のことを第一に考えていること、その人に合わせた目線で接することであり、様々な取り組みの中で五感をフルに活用して感じることができ、実りの多い研修でした。業務多忙の中、ご指導頂いたＴＡＫＡフィジカルステーションのスタッフの方々に深く感謝したいと思います。

添付資料　ＴＡＫＡフィジカルステーションでの様子

令和３年度中堅教諭等資質向上研修

特　定　課　題　研　究　レ　ポ　ー　ト

所　属　校	秋田県立増田高等学校	職・氏名	教諭　永須　裕貴
研 究 内 容	Ａ：本県の教育課題に関する研究 Ｃ：生徒指導に関する研究 Ｅ：道徳教育に関する研究 Ｇ：総合的な学習の時間に関する研究 Ｉ：その他		Ｂ：マネジメントに関する研究 Ⓓ：教科指導に関する研究 Ｆ：特別活動に関する研究 Ｈ：特別支援教育に関する研究
研究テーマ	Ｄ：運動に積極的に親しむ生徒とそうでない生徒の二極化に関する考察		

１　研究の概要

生涯を通じて運動に親しむ資質や能力を育み、将来も継続して運動をすることで健康を保持増進していくことに繋がることから極めて重要な課題である。本校の生徒の実態としても、運動に積極的に親しむ生徒とそうでない生徒の二極化は顕著であり、その傾向はとくに女子生徒に多いように思われる。また、学年進行に従って更に二極化の傾向はより深刻な状況になっていると感じている。

今回はそのような現状を踏まえて運動に対する意識調査を実施し、高校における体育授業についてどのような考えを持っているのかを調査することにした。調査方法はアンケート手法を用いて、本校で担当している総合学科の１年生男女を対象とした。本校では、１年生で全員が共習する形式で授業を展開し、２年生から選択制授業に移行する指導計画である。２年生から選択制授業を実施する際の人数バランスに極端な偏りが生じて種目毎に展開することが困難になってきており、その要因を検証したいと考えたからである。

２　成果と課題

◇アンケート実施：総合学科１年２組・３組・４組（男子４２名、女子３６名）

（１）体を動かす(運動する)ことが好きである　（男子８６％、女子５０％）
（２）陸上競技(短距離走・長距離走など)が好きである　（男子３３％、女子２２％）
（３）球技の個人種目(バドミントン・卓球など)が好きである　（男子８３％、女子７８％）
（４）球技の団体種目(バレーボール・バスケットボール・サッカーなど)が好きである　（男子７９％、女子３３％）
（５）武道(柔道・剣道など)が好きである　（男子１０％、女子　６％）
（６）高校卒業後も体を動かす(運動する)機会を確保したいと思う　（男子７６％、女子６４％）
（７）自由記述

◇上記（１）の割合は、男子８６％、女子５０％と男女に大きな差があった。次に（２）の割合は、男子３３％、女子２２％とどちらも低い割合であった。更に、（５）の割合については、男子１０％、女子６％とどちらも消極的な意見が多いことが分かった。本校では数時間この単元を取り扱っているがこれらの意識調査を踏まえて、楽しさを感じて少しでも前向きに取り組める工夫をしていくことが大切であると感じた。（３）と（４）について、男子は個人種目・団体種目の球技ともに約８０％の高い割合であるのに対して、女子は個人種目７８％、団体種目３３％と特徴的な結果であることが分かった。この部分を改善していくことができれば、選択種目に偏りが生じている要因を解消することに繋がるのではないかと考え、例えば、団体種目に親しみを持って取り組めるようにルールを緩和するなどの工夫をしていきたいと思った。（６）の割合は、男子７６％、女子６４％とどちらもそれなりに高い割合を占めており、様々な種目がある中で、自分の好きな種目であれば生涯にわたって関わっていきたいと考えている生徒が多いことが分かった。これらの層が運動離れにならないように継続して導いていかなければならないと感じた。今回のアンケート調査対象が１年生のみであり、２年生や３年生になってどのように変化していくのかを追跡調査していけば、更に実態把握ができて充実した授業に生かしていけるのではないかと感じた。今後の課題としていきたい。

３　指導助言

生涯に渡って運動（スポーツ）に親しむことは、現代の人生１００年時代を考えれば非常に重要であると思う。卒業後も運動に親しめるかどうかは、高校での保健体育の授業や部活動等が基本的な素地になっていくと考えられる。

特に本校女子については、運動部が少ないことから運動に親しむ機会が少ない点が懸念されますので個人種目を上手く導入するなど、今後の指導に期待している。

授業改善への取り組みについて

研　修　部

〈 研修部　研究テーマ 〉
生徒が自らの気づきを大切にし、問を発することで対話的で探求的な学びを展開するための授業改善

〈 指導主事訪問「１ヶ月前課題」〉
「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた組織的な授業改善
【具体的な手立て】
１　本時の授業における到達点を明確にし、生徒が目的意識を持って授業に取り組むことができるように「本時の目標」の提示方法を工夫する。
２　授業形態を工夫したり、ＩＣＴ機器を活用することで協同的な学びの場を設定し、他者との関わりから自らの考えを深め、発言や表現する場面を設定する。

はじめに

今年度の研修部の研究テーマに基づき、授業改善に努めてきた。１０月実施の指導主事訪問における「１ヶ月前課題」への取り組み等を通じて、授業改善への意識や取り組み状況について、授業参観シートの提出やアンケート結果（１学期と２学期〈指導主事訪問〉までの比較）からその成果と課題（中間報告）を以下のようにまとめた。

成　果

全体としては、多くの先生方が授業改善への取り組みに対して意識し、その方法や実践について思考錯誤していることわかった。

「本時の目標」提示に関しては、多くの先生方が、提示を心がけており、７５％がほぼ、もしくは毎時間提示している。（１学期比 22 ％上昇）内６％は毎時間提示している。提示しなかった（できなかった）理由として、授業時間内に単元やまとまりが終了しなかったために、次時の授業開始時に前時からの継続として提示しなかったという記述が見られた。授業においては、このようなことが多々生ずるため、ある先生は、前時の振り返りをし、「ここからの目標」と言う形で生徒に示しているという例もあった。このようなことから、提示のタイミングも必ずしも授業の最初とは限らない。１学期は、圧倒的に授業の最初に提示する比率が高かったが、２学期には、途中やその時々のタイミングで提示する割合が上昇している。生徒に目的意識を持たせて授業に臨ませるために、先生方が提示の工夫を意識していることの現れかと推測できる。

また、その提示方法も、２学期には、多岐に渡っている。黒板への板書にのみ留まらず、電子黒板への掲示や授業ごとに準備されたワークシートへの記入（事前に教師が記入済みや、生徒が記入するものなど様々）などである。アンケートは複数回答のため、複数の方法で提示している先生もいる。

「ＩＣＴ機器の効果的な利用」においては、多くの先生方が何らかの形で導入にチャレンジしている。現段階で全くの未使用は３％までに激減した。電子黒板や chromebook の生徒使用率が上がっている。「本時の目標」提示に加え、ＩＣＴ機器の使用により生徒の主体的活動を促すことができたとか、楽しそうに学習活動をしている様子を教師が感じているなどの報告が挙げられている。ただし、機器の使用（特に chromebook）に関しては、機能を駆使できる職員が少ないため、思考錯誤したり、使用に関する不安や悩みを抱えていたりすることがわかった。機器使用に関する研修を要望する声も聞かれた。

課　題

課題は「ＩＣＴ機器の活用」において、大きく二点挙げられる。

まず一点目は、機器使用の際の環境面である。機器使用に関する疑問や不安も聞かれる中、今後使用していこうとする職員の意識（意欲）の変容は大いに感じられた。しかし、教室によっては、機器を充分に活用できないことが明らかになった。普通教室以外に電子黒板がないことやｗｉｆｉ環境が充分に整っていないことによる支障である。また、接続に関する備品においても不足を訴える職員もいた。職員の意識の変容を支える上でも、環境面でのサポートの必要性に迫られている。

二点目は、使用における技術面の課題である。教師側の基本的な操作や接続がわからないといった初歩的なことや、どのような機能をどの場面で使用するのかがわからないという疑問も挙げられた。また、授業で活用するためのシート等、事前の準備にかなりの時間を要するようである。（操作に不慣れなために生ずる面もあるかもしれない）さらには、教師の予想以上に生徒が操作に手間取ったり作業に時間を要する場合もあり、年間指導計画を立てる際に、入念に計画していかないと（どの場面でどのような活動をどのくらいの時間組み入れるか）授業進度にも影響が及びそうである。

また、操作方法や効果的な活用法については研修を求める声も多数聞かれたので、研修部としても今後、機会を設けて実施していきたいと考えている。

生徒の主体性を引き出し、思考力や判断力の育成するために授業の在り方を模索している状況である。ただ、その他の記述にあるように、現在の授業改善への取り組みは教師個々によるところが大きく、１ヶ月前課題の「組織的な取り組み」までには発展していない。個々の授業力を高めつつ教科内、さらには教科横断的に拡大していくことが今後の継続的課題と言える。

授業改善への取り組みについて（アンケート）

令和3年度における、ご自身の授業改善への取り組みについて、以前（年度当初、もしくは1学期）と現在（指導主事訪問の1ヶ月前課題への取り組みまたは2学期）を照らし合わせ、その成果や問題点等について以下の質問にお答えください。

職員番号（　　）氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

〔課題〕「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた組織的な授業改善

〔具体的手立て〕
1 本時の授業における到達点を明確にし、生徒が目的意識を持って授業に取り組むことができるように「本時の目標」の提示方法を工夫する。
2 授業形態を工夫したり、ICT機器を活用することで協働的な学びの場を設定し、他者との関わりから自らの考えを深め、発言や表現する場面を設定する。

手立て	種類	年度当初、または1学期	現在または2学期
「本時の目標」提示	提示	□ ほとんどしていなかった □ 時々していた □ ほぼしていた □ 毎時間していた	□ ほとんどしていなかった □ 時々していた □ ほぼしていた □ 毎時間していた
	タイミング	□ 授業の最初 □ 授業の途中 □ その時々のタイミングで □ その他（　　）	□ 授業の最初 □ 授業の途中 □ その時々のタイミングで □ その他（　　）
	方法	□ 黒板に板書する □ 電子黒板に表示する □ 口頭で伝える □ ワークシート等に記入させる □ その他（　　）	□ 黒板に板書する □ 電子黒板に表示する □ 口頭で伝える □ ワークシート等に記入させる □ その他（　　）
	自由記述		
ＩＣＴ機器の効果的な活用	頻度	□ 全く使用していなかった □ 使用回数は5回以下 □ 使用回数は10回以下 □ 使用は11回以上 □ 毎時間使用していた	□ 全く使用していなかった □ 使用回数は5回以下 □ 使用回数は10回以下 □ 使用は11回以上 □ 毎時間使用している
	使用機器	□ 全く使用していなかった □ 電子黒板 □ タブレット（教諭のみ使用） □ タブレット（生徒使用） □ プロジェクター □ その他の機器（　　）	□ 全く使用していなかった □ 電子黒板 □ タブレット（教諭のみ使用） □ タブレット（生徒使用） □ プロジェクター □ その他の機器（　　）
	自由記述	＊使用上の問題点・課題・疑問等	

＊ご自身の授業改善への取り組みを振り返り、どのような成果がありましたか？

＊授業改善への取り組みの中で、課題（困難）に感じていることや問題点は何ですか？

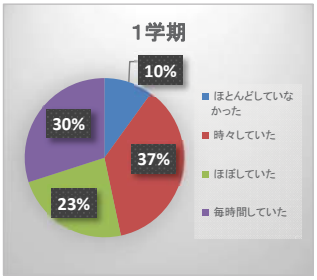
＊その他何かお気づきのことがありましたら、ご自由にお書きください。

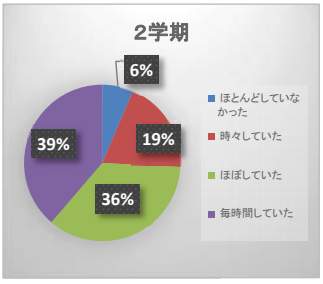
ありがとうございました。

授業改善への取り組みについて　〈アンケート結果〉

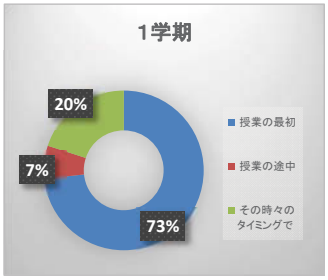
【本時の目標提示】

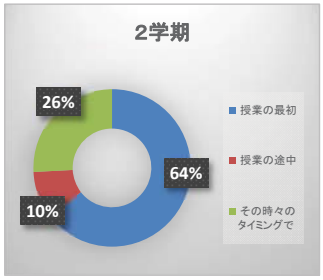
〈 提　示 〉



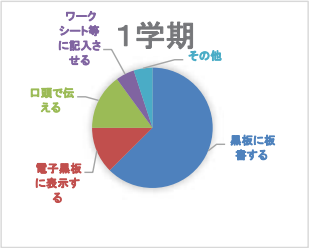


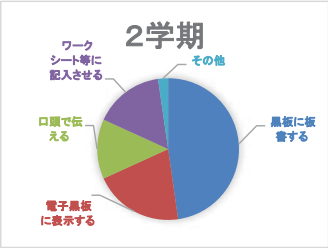
〈 タイミング 〉





〈 方　法 〉



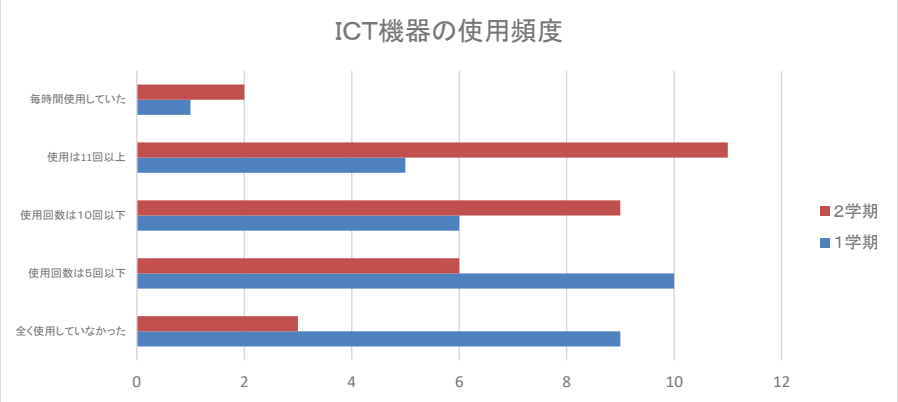


〈自由記述〉

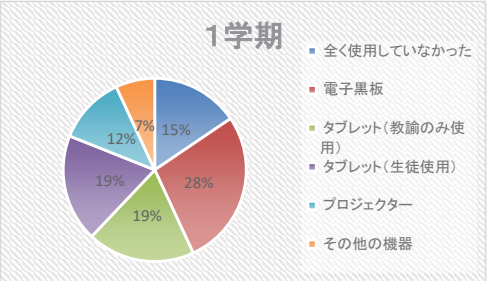
- 単元の切れ目と授業時間の終了が一致せず、次時の授業で目標を提示しないことがあった。
- 毎時間、区切りの良い所から授業が始まるわけではないので、「本時の目標」としてではなく、「ここからの目標」という形で提示した。
- 提示のタイミングは、単元の学習内容によって良いタイミングで提示している。
- 「本時の目標」に加え、「学習課題」を提示することもあった。
- 「本時の目標」提示後、本時の学習の見通しが持てるような流れに改善し、生徒が主体的に動けるように配慮した。
- 選択科目により、使用教室が固定されている場合は、長期的な目標を掲示しておくのもよいかもしれない。
- 毎時間提示できるようにしたい。

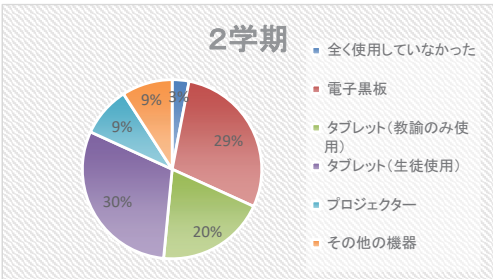
【 ICT機器の効果的な活用 】

〈 使用頻度 〉



〈使用機器〉





〈自由記述〉

＊使用上の問題点・課題・疑問等

（環境面）・Wifiの環境が充分でない。（理科棟・実習棟・屋外）〈9〉
・授業を行う教室に電子黒板が設置されていない。〈5〉
・延長コードが足りない。（私物を利用しなければならない）
・使用環境を求めて空き教室を探したり、教室移動をしなければならない。〈4〉
・教諭用のタブレットは一人一台あってほしい。
・生徒が自宅に持ち帰れない。

（教師側）・ICT機器の活用が多岐にわたらない。（上手く使えない）
・機器に不慣れなため、次の操作への移行がスムーズに行えないことがある。
・活用してみたいと思うが、方法を聞くためにその先生の手を煩わせてしまうのが申し訳ない。
・研修を実施してほしい。
・調べ学習からの切り替えが上手くいかず、教師側の板書や解説がタブレットを見ながらの同時進行となってしまう。
・ICT機器を利用して理解を深めるにあたり、「書く」という活動を重視しなければならないと常々考えている。

（生徒側）・タブレット使用の際、教師側の想定以上に生徒は時間を要する。
・生徒の目的外使用（ゲームや動画の閲覧）を防ぐのが困難。事前に注意喚起するが教師一人の目では限界がある。

（その他）・授業アンケート以外に使用していないので、今後チャレンジしたい。

＊授業改善への取り組み上の課題（困難）

〈目標提示〉・本時の目標提示のタイミングが難しい。最初に示すと作業のような雰囲気になり、しらけてしまうこともあった。目標に関わる内容が後半に展開されることもあり、提示のタイミングに悩んでいる。

〈ICT〉・スキルアップがむずかしくなっている。
・新しいことを覚えるには、時間も要するため、多忙化解消の対策が必要。
・ICTの適宜利用。依存ではなく併用が大事だと思う。生徒もあえて電子黒板でなくてもいいという声を耳にしている。
・ICT機器活用について、苦手意識が強く、つい敬遠してしまっている。できるところから取り組むようにしていきたい。
・効果的な活用。Wifi環境〈2〉。
・調べ学習からの有効な切り替え方法。
・使用するタイミングや内容。
・課題シートの作成など教材準備に以前より時間が要する。〈3〉
・ネットの情報がすべて正しいとは限らないが、様々な情報を入手しやすいことは確かである。これまでできなかった活動につなげていきたい。
・ICT機器を活用するにあたり、自分自身に知識・技術が全く不足していること。
・Googleクラスルームを効果的に運用できていない。
・わからないことを解決できるスタッフがいない。
・課題配付等で授業外での学習機会がもてない。（＊昨年度の研修では、タブレットは生徒に「文房具として使用させてほしい」と言って いたが、本校ではそれができていない）
・ICT機器の活用が増えることにより、生徒との授業中のコミュニケーションの仕方が良くも悪くも変わったように感じる。
・機器を活用できない能力不足について、スキルアップの必要性を感じている。
・操作に慣れること。・活用方法のアイデアが必要。
・タブレット使用時は生徒の気が散りやすい。いたずらをする（他者の文章を消す、ジャムボード自体を消す等）もあったので、指示が必要となる部分が増える面もある。「今は黒板を見てください」、「プリントに書きましょう」等の具体的な指示が大事だと考えている。

〈その他〉・授業準備にかける時間が不足しており、満足のいく授業改善がはかれていない。
・話し合いの場は設けるが、なかなか深い話し合いにはなりにくい。
・知識・理解に重点を置きすぎて、生徒に考えさせる時間を持つことが少なかった。どのようにして思考力や判断力を養うかが課題である。
・音読活動やペアワーク・グループワークを行うことにためらいがある。（コロナ対応）
・教材研究する時間がない。フィードバックの機会が少ない。
・授業改善は個人によるものが大きく、組織として取り組む感じがない。
・良い授業がわかない。
・評価にどのように活かすのか。（次年度の１年生からは評価をつける）

【 成果と課題 】

アンケート結果から、多くの先生方が試行錯誤しながら授業改善に取り組んでいる姿がうかがえた。
「本時の目標」提示に関しては、1学期比22%の上昇が見られた。また、その提示方法も黒板に書くのみに留まらず、電子黒板を利用したり、ワークシートへの書き込み形式にしたりと多岐に渡っている。タイミングも、授業の初めとは限らず、途中やその時々のタイミングで提示する場合が上昇していることから、生徒への目的意識喚起のために日々工夫しているものと思われる。
また、ICT機器等の活用度合いも増えていると共に、活用していきたいと考える意識の変容が見られる先生方も増加している。しかしながら、その利用にあたっては、様々な障害が挙げられており、意識の変容を支え活用を促す上でも、環境面における問題の早期解決が望まれる。活用における技能等については、個人差もあることから研修を要望する声も多数聞かれたため、その機会を設けていきたいと考えている。
実際に活用している先生方からは、生徒が主体的に活動している様子や、生き生きと楽しそうに活動している等の報告が寄せられている。本校生徒の授業時における印象として挙げられている自己表現の乏しさや自身の考えを積極的に発信することへの苦手意識が、少しでも解消される手立てとなり、学習効果のあがる機器使用であることが望まれる。生徒の主体的な活動が、ひいては思考力・判断力の育成にも結びつくことを期待したい。
さらに、先生方の個々の授業改善への取り組みが個人から教科内、他教科連携へと拡充し、組織的な取り組みとなっていくことが今後の継続的な課題とも言える。

編集後記

今年度も初任者研修を含め複数の年次研修者が在籍し、各教科間での充実した授業研修が実施されました。

授業改善においては、ＩＣＴ機器の効果的な活用が今年度のテーマとなり、互見授業に力を入れました。ＩＣＴ機器の活用については、多くの課題が提示され、ますますの研修の必要性が確認され、次年度も積極的な互見と授業改善が期待されます。

最後になりましたが、研究紀要編集にあたり、原稿を寄せていただきました先生方に、厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

表紙　「枯れていく」　2年4組　土田　琉世

令和３年度　研究紀要

令和４年３月発行

発　行　秋田県立増田高等学校
住　所　秋田県横手市増田町増田字一本柳137
電　話　０１８２（４５）２０７３
ＦＡＸ　０１８２（４５）２０８８
メール　masuda-h@akita-pref.ed.jp